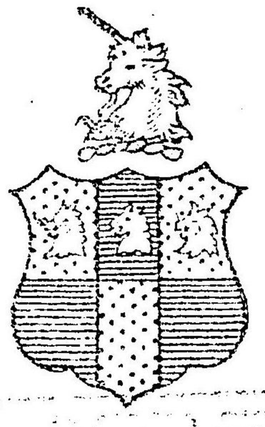
112
266

馬賊横行記

實地探險者
高野孟月著



馬賊横行記

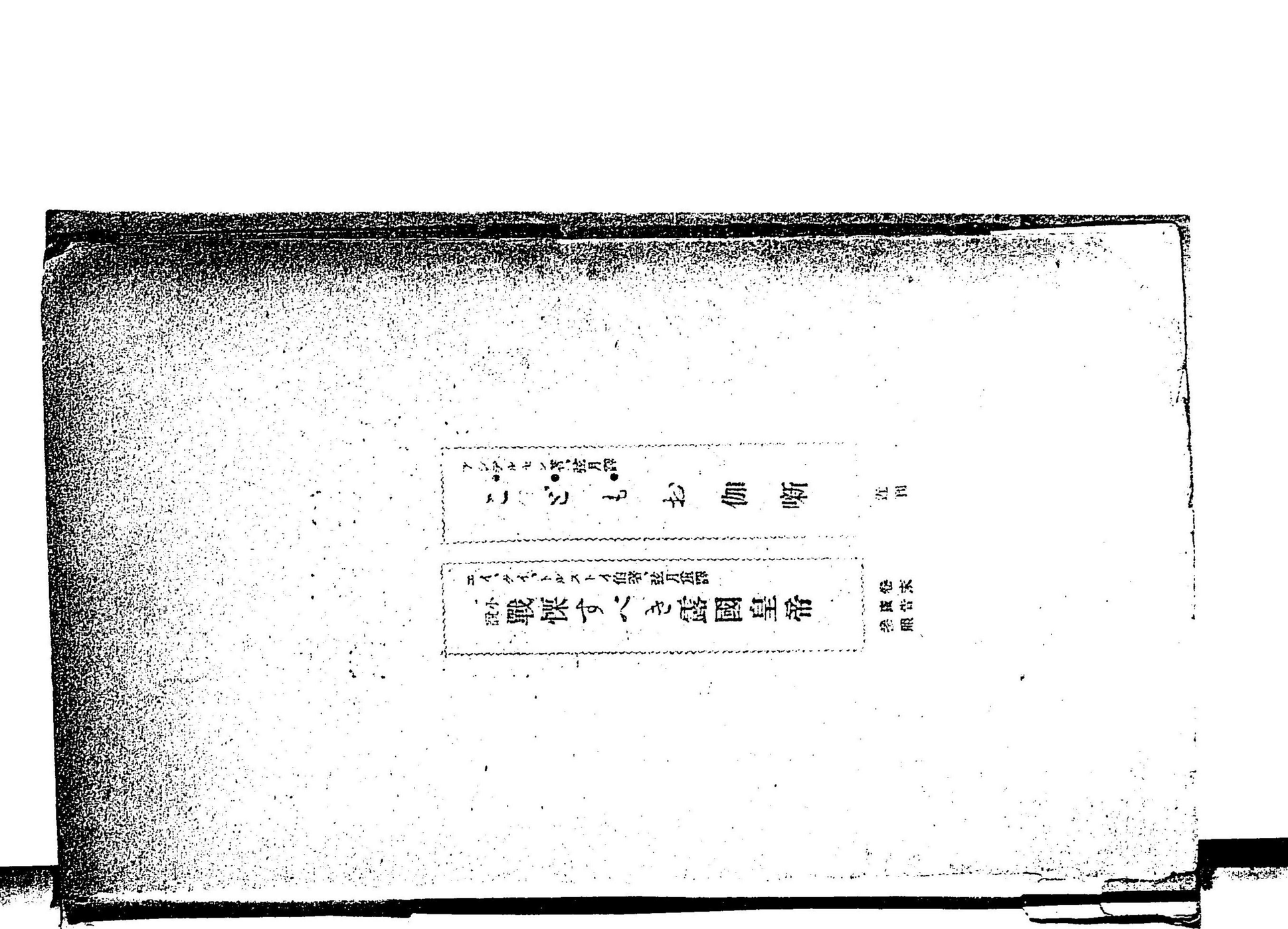
明治
39 12 21
内交

謹んで本書を

馬賊司令官 自稱陸軍中尉 白澤君閣下

軍事的秘密計畫者馬賊澤村お蝶さん

に献す


ドイツ・オーストリア伯爵・露月侯爵
ツ・ア・ル・ヒ・ン・ド・ル・ス・ト・ル・ス・ト・ル・ス・ト

斬首刑の執行

（其二）轉がる首級を拭ふ血糊

はしがき

日本が處女的温和主義を執つて、手に負へぬ土人を手懐けんとし、反つて甘く見らるるに反し、馬賊は狂犬的暴力に訴へて、喰はれぬ土人に喰ひ附き、彼等をびく〳〵さして其生命財産が上に君臨し、今や其勢力絶頂に達した。是に於いて「馬賊何者ぞ？」といふ疑問が、新たに繰返へさるゝのである。弦月滿洲に在ること二年、任務の關係上、屢々馬賊に近き、多少彼等間の消息を窺ひ知るの故を以て、茲處に本書を著して、此疑問に對する答案となすに至つた。

殊に第二十三項乃至二十八項に記せる秘密輸送及び第三十五乃至三十七項に記せる馬糧輸送は當時自分の最も苦心せ

る所であつた。
著者もと英語初學に關する數種の小著ありこ雖へども、出來筆の人にあらず、文を行るに拙く意を盡くす能はざる處多きを遺憾に感ずる。敢へて賢明なる讀者諸君の推讀を冀ひたい。

十月

著者誌す

目次

口繪　斬首の刑執行……（百數）
一　馬賊の天下……一
怪しかる時句——切り取り強盜馬賊の慣ひ——退嬰主義——侵略主義——馬賊は人心を支配す——奮鬪的活動——日露戰爭の一原因——馬賊司令官日本陸軍少佐
二　機敏なる馬賊……七
一撥的掠奪——由々しき電報——斥候——金滿家を嗅ぎ出す——氣脉連絡
三　奉天城の乘つ取り……一一
城門の警戒——白痴威し——大岡越前守——著者奉天城門を排く——宋山子——一人と三十人
四　滿車中の變裝憲兵……一五
著者の探檢旅行——第二の危險街道——人を見たら泥棒と思へ——馬賊の出現——紅帽子
五　青天霹靂……一八
憲兵補助卒の注意——鹽賊區域——熊岳城——ぱら〳〵ぱら——風聲鶴唳

六　行路難……一〇
雨天――旅行の大敵――支那の道路――友人の商賣
七　賣藥行商人の極惡手段……一二
唸詰者――羊頭を掲げて狗肉を賣る――丸藥の屢造――草根木皮より劣る――法外の値段
八　抱腹絶倒なる診斷……二四
當テヅッぽうなる診斷――藪醫者よりも危險――頭痛に痛氣の藥――石灰に蛙取粉――人道問題
九　賣藥行商の恐喝手段……二六
五十錢又は一圓を施しに與ふ――坐り込む――婦人に弄ふ――なぐる――滿手で渡――五錢で一圓――元價三十錢の薄荷五百圓となる――物品の微發――馬賊よりも恐れらる――爲政上の妨害
一〇　飯店の慘劇……三〇
奸商の流せる觀面の弊害――馬賊の噂到る處に藉々――飯店の說明及び旅具携帶旅行――馬賊
日本人を殺して頭顱を粉碎す
一一　深刻なる復讐……三二
奇拔なる驛天嶺――文學思想――臨終の暗ひ――二度と人手に渡すことはならぬ――大死が何で
國家の爲めになる――墓がぶる〳〵と動く――無念の固まり――露國を咀ふ――日本軍隊の先導
一二　摩天嶺……三八

平凡なる驛天嶺――馬賊の根據地――奉天將軍の苦腦――馬賊の天下
一三　東海道、箱根、雲助……四〇
安東縣奉州街道――沿道苦勞旅の灰
一四　官兵兼馬賊……四一
昨は官兵、今日は馬賊――馬賊上り
一五　旅店と馬賊の關係……四二
客棧に斥候を派遣す――旅店馬賊に通ず――客棧兼馬賊業
一六　旅客追剝ぎ權の賣買……四二
旅客の讓渡し――彼の眼力は遠はない
一七　咄！失踪軍人……四三
行衛不明軍人の辨護――卑怯なる失踪者一人あり――彼を懶死せしむ――廣島師團輜重兵――
所罰を恐れて逃亡す
一八　馬賊保險手形……五〇
盜難除けの符護――大手振つて通る
一九　馬賊村、保險稅……五一

全村全く馬賊に加入す――共同組合の保險税

二〇　危機一發……五二

廣天嶺山中馬賊に出逢ふ――發砲――喇叭の音――危急を免る――官兵、賊の術中に陷る

二一　山中の一夜……五五

金滿家の宅に泊る――馬賊より使者來る――神醫先生

二二　馬賊と語る、革命家……五八

朱鳳山の人物――少壯氣鋭――陳奚の卵子――馬賊となれる理由――父の仇を打つ――良民を犯さず――金を銀行に預ける――彼の志小に非ず

二三　日探露探の混戰、秘密輸送……六二

中立地――日探露探――日本馬賊――馬賊司令官利根河少佐？――戰時禁制品大輸送――鮮州通過の秘計

二四　秘密の暴露……六七

清幇子にて輸送差止めらる――千弗の賄賂無効

二五　必死の覺悟、馬車輸送……六九

殺れて止まん――馬車五百輛――馬車の戰鬪

二六　露國行き銀貨差押へ……七一

支那銀貨五十萬元――夜中の發見――押收し來る

二七　鐵路大臣の哀訴、白澤氏の强硬……七二

鐵路大臣清幇子に出張す――大臣の辨疏哀訴――頑として應ぜず――壯快なる談判――破裂？

二八　局面一變、利益交換……七四

差押へ金を返還せん――禁制品輸送を諾せしむ――約成る

二九　清國鐵道の七不思議……七五

第六十號列車――廣軌鐵道――夜行列車なし――正月に滿車なし――四等客車――荷物は無賃――巡警――開札所なし――釣り錢を渡さず

三〇　馬賊滿車を襲擊す……八〇

第六十號列車の大任務――双靈子の鐵橋――停車――乘客を裸にす――富豪捕獲さる

三一　諸侯の搏、身受金……八四

宛然城郭をなす――諸侯の觀――身受金の交渉――人質――放免

三二　支那芝居の生命……八六

芝居小屋――花道がない――時代物多し――大音なる白

三三　孝女の犠牲……八八
支那演劇の一例——因強親父——慈悲深き娘——泊り客——意外の殺人——父の悔悟

三四　紅鬚子侯爵……九一
貴女旅行中の遭難——山賊——匿名書簡——花房男爵——光子男裝して走る——鳴梟閣の活劇

三五　海賊に遇ふ……九六
馬賊輸送——大ヂャング——發砲す——日本人を手込みにす——陸には馬賊、海には海賊——形勢必迫、著者立退きを請求さる——海賊の探檢

三六　海賊討伐……一〇〇
二隻の小蒸汽船——艇隊今朝未明出發す——砲聲殷々——海陸夾擊——知縣——大勝利

三七　海賊全滅、分捕功名帳……一〇二
機關砲を沿びせ掛ける——賊逃亡す——退潮——連判帳——兄弟の契ひ——血判——功名帳——憐むべき兄弟

三八　大仕掛けの海賊……一〇五
蒸汽船を襲ふ——船客となりて乘込む——内部より破裂——平時は漁夫——匪賊——梁山泊——討伐官軍

三九　死刑執行實觀記……一一〇

刑場は塞の中央——馬賊の末裔——美男子——厚惡なる面魂ひ——最後の憎々しき世迷ひ言——弟斬らる——首を斬る音——怨みの眼光——斬り損ひ——上から突く——血が走る——清國死刑執行場の酸鼻——首の捨場

四〇　世襲的馬賊……一二〇
盧朋の祖先——官人討伐——人種は逐ふ——趣味は異なる——別働隊——敵の裏面側面に出づ

四一　銃器密輸入……一二四
帆前船に積む——大連を避く——ヂャンクに積み換ゆ——衝突

四二　遼河結氷の偉觀……一二六
驚くべき急流——千波萬波先きを爭ふ——氷流——氷塊相重疊す——玉顔玲瓏——悲壯美

四三　遼河解氷の凄壯……一二九
解けるのではない——陸が流れる——猛獸の噛合ひ——解氷の後を飾る

四四　破天荒なる先鋒……一三一
猛進又猛進——御法度破り——遠くの音、哈爾賓に滑り込ひ——露人と結托す

四五　天下第一の賭博國……一三四
賭博的饒倖心——正月は賭博月——全社會が然り——死を賭する大賭傳

四六　劍の力……一三六
博徒遠西に乗込む——先登第一——兵士の故障——白及を提げて官衙に暴れ込む——賭博公許
税を納む——大々的廣告——利益各一人二千元

四七　修羅の巷、賽は魔物……一四〇
連勝の百姓——一六勝負の仕方——賽は魔物——局面一變——若物を賭ける——嗤嘲の對手は
嘉嘱——足の甲にぐさり——腹背敵を受く——旅宿を襲ふ——泣き寢入り

四八　龍虎の劇鬪、破天荒なる仲裁……一四六
滿洲小戦——我慢の般若——商賣敵——朝鮮の——此の狸野郎——復讐戦——大失敗——意趣
返し——仲裁者——手打ち——軍事的秘密計畫

四九　女馬賊……一五二
容姿最も優美——是で何うして荒くれ男の上に立つ？——一篇の小説——十九年が經歴は小
説以上の珍

五〇　波瀾多き澤村お蝶が半生……一五三
東京ッ子——赤血球——江戸的遊藝——少女界の女王となる——無限の勢力——非常の感化
力——お蝶本位——美人崇拜論——婦人の美は權利なり、醜婦は災なり

五一　天才、姫御前の文身……一五七

古今獨歩——兩親の誇り——金襴に糸目を附けない——經濟可し藝は可し衣裳は可し——文
身の計畫——血達磨——得意なる踊に因めるもの

五二　石橋、眞紅牡丹……一五九
十八番中の十八番——狂ひ獅子——身の輕さ——獅子の狂へるを見てお蝶を見す——ぱっと眞
紅牡丹が一輪——丹精の文身——活々せる玉の肌の血色——嫋妍の極、嬌麗の極——お蝶が得
意——今も尚眼前に髣髴す

五三　痛快淋漓なる懲戒……一六二
家運一轉——藝妓となる——京間牡丹——三幅對——小股のゞった後姿——暴力に訴ふ——
稽古屋で擲る

五四　流轉又流轉……一六四
大阪趣味、大阪言葉を嫌ふ——滿洲に渡る——海に投ず——懸口金城館——金千代

五五　好箇の芝居……一六六
愛海圖を探に賣る——五千圓——待ち焦る——强盜は我良人——度胸試し

五六　お蝶遂に馬賊となる……一七〇
良人と死別れ——亡夫に代り部下を指揮す——軍事的秘密計畫

項外
暢氣千萬なる戰鬪演習……一七二
南北両洋軍――銃劍を附けずして突喊す――靴を脱いで徒涉す――突撃の際、手を挑ねて見物す――同志打ち――敵丸の下を悠々通過す

（目次終）

馬賊横行記

弦月著

一　馬賊の天下

怪しかる警句――切取り強盜馬賊の慎ひ――退嬰主義――侵略主義――馬賊は人心を支配す――奮闘的活動――日露戰爭の一原因――馬賊司令官日本陸軍少佐

怪しかる警句が流行する、

「滿洲の名物――馬賊！」、乃至

「滿洲の馬賊か、馬賊の滿洲か。」

更に甚しきに至つては、

滿洲座の花役者――馬賊！」、

嗚呼苟も政令嚴に行はるゝ地方にあつては、夢想するだに能はざる、恁んな馬鹿氣た經的警句が、滿洲にあつては、能く其實際を穿ち得てゐるから慨くではないか。

まこと、馬賊は滿洲に於ける**無冠の帝王**である。大親分である。全滿洲を擧げて、彼等の細張り内にあらざるなく。彼等が無數の乾兒は、到るところに充滿してゐる。

彼等が赫々の勢力、東三省を傾倒し、彼等が冲天の意氣、全土を呑まんず概あり。其の**端倪**すべからざる**機敏**と、**大膽不敵**なる**冒險**と、天**下無類**なる**野獸的蠻勇**を揮つて、最も花々しく**一揆的**暴行を恣にし、天下晴れて「**切り取り強盜**馬賊の慣ひ」を實行してゐる。

▲退嬰主義を遵奉して、處女的なる日本が、列國へ氣兼ねしいしい、嫌々ながら、滿洲の各地を開放する態の傷心しさ

▲猛進主義を斷行して、暴虎的なる馬賊が、誰憚らず、我が物顔に、彼の廣野を、馬蹄に蹂躪する傍若無人の振舞の小氣味善さよ。

□愚柔主義を標榜して、寛大なる日本人は、內實、土人に輕蔑せ

られ、

□果敢主義を執つて、假借する所なき馬賊は、土人に心から頼傾せらる。

地圖上の滿洲を占領せるは日本だ。

滿洲の**人心を心から支配**するは、**馬賊**だ。

我軍隊が駐在せる間こそ、流石、其が强力なる威壓に、是非なくも、屏息の態度で、雲に隱れ、地に潛り、姿を現はさなかつた、が惡事に掛けて寸毫の拔目なき彼等は、かゝる際ざき間にも、安眠を貪るべき程、それは必暢氣ではない。陰に徒黨を勸誘し、武器を調へ、萬端の用意、をさ〳〵怠りなく、活動の時機を待ち組びた。

一朝、我軍隊の撤退するが早いか、「さア御坐んなれ」と猛然と蹴つて起つた。

たとへば、睡れる獅子が、夢から覺めて、咆哮一番、武者振ひ起てるにも似たり。

一躍して、鵬子窩の掠奪となり、二躍、流車の襲撃となり、更に三十里堡の暴動となつた。

彼等が奮闘的活動は、きびしく、見るから快心の至りである。宛も好し、滿洲の特産として、其名も高き高粱は、今や十二分に生育繁茂して、其丈け能く人影を沒し、出沒を晦ますを得、これ馬賊に執つて、天の與へで、屈强の便利である、

天の惠、地の利を併有して、滿洲は全く馬賊の天下となつた。

事實上、滿洲は彼等の手に陷れりと云ふも可なりだ。

馬賊の勢力、驚かざらんと欲するも得べけんや。

讀者！試みに、偉大なりし日露の戰は、抑々何が爲めに起つた乎を思へ、蓋し其原因は種々あつたらう。

貪欲飽くを知らざる露國が、荒鷲的野性を發揮して、其鋭き双爪を剝き出し、圖太くも、滿洲てふ好餌を、横から掻浚はんとする。どつこひ、夫は可かぬ、そんな虫の善い事を、旨々と行らせることは、此の俺が承知出來ぬ、と日本の敵愾心が梢を衝いて出る。

辛き熱湯を呑まされ、慘憺たる十年を忍び來て、最う堪忍ならぬと、忘るべからざる復讐心の凝固りが、頭を擡げる。

などと今更らしく述べ立てるも管である。唯著者は爭の原因の一として――たとへ遠ひく原因にせよ――馬賊を除外することは出來ない、と斷言し度いのだ。

當時、日本からの再々の抗議を耳にも入れず、露國が優勢なる軍隊を南滿州から撤退するのを、悠圖く遣くつたのは、『一帶に溷蠻せる馬賊の變に備へる爲めだ』といふ都合の善い口實を作つて列國の耳目を欺かうといふ腹があつたのではなからうか。

何も、自分は、さう思はれてならない。現に同じ遣り口の新しい實例がある。

見よ、彼は既定の撤兵期――四十年四月――を今日尙何かして延期せしめやうと、北滿洲の馬賊に賄ひ、隨時各處に暴亂を起さしめ、そを口實に、吉林、黑龍江兩省に拔くべからざる永久的經營を成就せんと工らんでゐるのは、最も明確なる事實ではないか。

此を見ても、過去に於いて、將又、將來に於いて――戰爭が必ず起らなければならないが――滿洲名物たる馬賊は、何の道、喧嘩の曳合ひに曳張り出さるゝことを免れない代物である。

又その戰爭の眞最中に於いても、彼我兩軍正々堂々の陣を張つては居るものゝ、翻つて其裏面を伺へば、色々の事を行つて居る。互に馬賊を利用し、種々な事に使つて、色々の役を爲せて居る。從つて日本的馬賊、露西亞的馬賊と云へる名さへ出來るに至つた。

此等固より軍機に關し、秘密に附してあるから、著者が、叩りに素破抜く譯には行かないのであるが、當時、日本軍隊からの御朱印を頂いた者が、馬賊の仲間に少くはなかつた。否、彼等は恁く自稱するのであらうか。

馬賊の司令官又は幹部に日本人があつたのは、確だ、公然の秘密だ。此等の日本人の多くは陸軍の特別任務を帶びたる曹長又は軍曹乃至休職軍人であると自稱してゐる。甚しきは佐官の榮職を、僭稱してゐる手合さへある。

これら果して自稱か僭稱か、賢明なる讀者、暫く著者の口を箝ましめよ、知る人ぞ知る。

次章以下、著者が單身虎穴に出入して探り得たる所を通讀せば眼光紙背に徹する讀者は、首肯する所あらん。

二　機敏なる馬賊

一探偵掠奪――由々しき電報――厄候――金滿家を吳さ出す――熱腸連絡

忘れもしない、明治三十九年七月廿五日、全國新聞紙が、等しく掲げたる

「馬賊大舉して貔子窩を襲擊す」

てふ大連急電は、遽然として人心を騷動せしめた。

尋いで情報が現はれた、

「該地を襲つた賊徒は、少くも其數百五十を下らず、駐在所を燒燬し、市街に放火し、銀十萬兩を掠奪し、我が巡査數名を死傷せ

しむ。』

『賊は船に乘りて、海に出で、海賊的横行を恣にし、形勢頗る不穩なるを以て水雷艇を派遣す云々。』

其後の電報は、引きも断らず、瀕々として、馬賊の續出を報せざるはない。果には**大學**して**奉天**を**襲**ふ計畫ありなどと、如何にも**由々**しき通知さへ來るに至つては、事の容易ならざるに驚くのである。

滿洲の事情に通せず、馬賊の實況に疎き人々は、定めし訝しく思ふだらう。よし少數とはいへ我守備隊駐在し、巡査憲兵配置せる地方に於いて、恁くの如く大筵に徒黨を組んで、一揆的掠奪を行られやうなどとは、事實あり得べからざる底の事で、一体何いふ仔細だらうと怪しむだらう。

其後更に『彼等の大部分は、海上まんまと山東省地方に落ち延びた』といふ報を見るに及びては、網の如く我が取締の蜜なる地方を、何處を何して潜り出たか、或は又『山東省に於ける賊徒の黨

與が、警戒怠りなき、鴨子窩の沿岸に、救け船を派遣して我軍隊の手に、將に塵殺の憂目に遭はんとする賊徒を迎へ、其危急を救へる手段』の機宜に適したることを見て、何して、そんな事が出來るだらうと。益々解らなくなるであらう、

讀者思へ、廣袤限りなの滿洲の野に生ひ茂れる八千草と、負けず劣らず蔓れる數知れぬ馬賊は、中々少數なる守備隊で、遺憾なく取締り得るものではないよ。東を撃てば西に奔り、南を防げば北に出る、其隱現出沒疾きこと魔の如くで、全く手の附けやうがない、其進退掛引の巧妙なる、當局者も防禦の策出づる所を知らない。

加ふるに彼等は、智略に富み、塹壕を踏んで、最も熟練せる幾多の斥候を、四方に放つて、我守備隊の一舉一動を探ぐるに油断はない。

殊に彼等は、各地に於ける**目星**しき**金滿家**及び**大金**の**集散**を探ることを促るのである。

宛も獵犬が其贄をあさるに夢中になるやう。

我當局者と雖へども、神ならぬ身の、寸毫も隙がないといふ譯には行かない、手當の充分行屆き兼ねる處もある、賊徒は其處を附け込んで虛を衝いて出るのだから始末に行かない。

それに彼等は、南の端から北の果に至るまで、頗る巧みに氣脈を通じ、彼等仝志互に連絡を取つてゐるから、何な情報でも譯なく直ちに、隅から隅まで急報することを得、だから何でも思ふ通り自由自在に行くさ。

此處に於いて、讀者は合點せらるゝであらう、賊徒が巢子窩で奪ひ取つた十萬兩は、關東民政署に上納すべく公吏が集金せるを、斥候が嗅き出したのだと。或は、機宜に適して、對岸から救助船を送り寄したのも、これ畢竟巧みなる連絡が取つてあつたからだと。

三　奉天城の乘つ取り

城門の警戒――白痴威し――大岡越前守――若者奉天城門を排く――案山子――一人と三十人――

既に記せる電報にあつた『奉天の乘つ取り』と雖へども、彼等の勢ひを以てすれば、强ち出來ない相談ではない。

見給へ！奉天城の警戒の實際を。外見こそ嚴然として、如何にも凜々しいものであるが、其實、無勢力なること、全く話にもなつたものではない、有名無實の**飾物**に過ぎない。全く**白痴威**しだ。

例へば、其が四方に建てる城門は、毎夜必ず鎖さるゝこと、宛も我舊幕時代に於ける城廓の見付けと異らない、然れども我が見付けは、無限の勢力と、之に供なふ實力とを**實際**に**有**してゐた。江戸奉行たる**大岡越前**の勢力を以てして、尙夜半叩りに**小石川門**を開くことを憚かつた。

之に反して、閉鎖せる奉天城門を開かせるは、造作ない、之に就

いて著者が失敗談、寧ろ成功談がある。

嘗つて奉天に遊べる際、郷に入つて尚郷の事情に暗き自分は、夢にも城門の夜間閉鎖さるゝことを知らない、況んや〆切門限をや だ。知らぬが佛で、悠々支那芝居を見物し、入浴さへ行つて、馬車を驅り、意氣揚々、城門に來たまでは善かつたが、閉めてあるのに一驚を喫した、全く困つた、翌朝まで出られない日には、大變だと、大悄然に悄然た。

だが、人間究すると通ずで、名策(?)が出るものだ。

乘るか反るか一番試めして見やうと、今し思ひ浮んだ通り馭者を して門番の巡兵に交渉せしむると、忽ち其一人が馬車を覗きに來て、著者の顔に一瞥を與れ、直ちに開門に及んだ。

何? 談判の摸樣を語れと!

好し、恁うである。「主人は日本の大々的官人で今宵知縣に招待された飯さである、此處に知縣の名刺を持つてゐる、素直に開門すれば可、さもなくば其方等の爲めになるまい」と時代物的白を

演らした。

若し此の脅喝が効かなければ、袖の下を使ふまでと思つた。支那といふ國黄金萬能主義で持ち限つてゐる。賄賂でも取らないのを人格にでも拘はるやうに思つてゐる國柄だもの、此の樂で門が開かないことは、先づ〳〵あるまいと考へたのだ。

案するより產むが易く、第一の脅喝策が首尾能く功を奏した、無位無官の一匹夫たる著者は、畏くも大官人と成り澄まし、最も鷹揚の態度を裝つて、關門を通過するが早いか、思はず振り回つて舌を出したのは滑稽であつた。

金城鐵壁中の最要咽喉たる關門

にして、既に此くの如し、他は推して知るべきのみ。

更に、より多く讀者をして呆然たらしむる事がある。

毎夜、城門が鎖さるゝ頃には、鐵道停車場に至る一帶の沿道に、警戒線が張られる。要處々々に支那巡兵が武裝して、しかつめらしく、つゝ立つてゐるが、彼等は、單に案内子に過ぎない、勇敢

でないこと甚だしい。

馬賊が三々五々隊を組んで、彼等の眼の前を横ぎるとも、少しも知らぬ顔をして見脱して了ふ、蓋し臆病此の上なき巡兵は、うッかり手出して、反對に遣つつけらるゝのを恐れるからだ。ともすれば、浮足立てゝ逃げだすのだ。

まこと、支那巡兵の**意久地**ないこと話にならない。全く**腰拔**けだ、然るに一方、馬賊と來れば、生命を投出して掛つてゐる死に者狂ひの猛者だから堪らない、十人や二十人の巡兵を、遣つゝけるのは譯はない。誰だかゝ、「巡兵三十人に對して、馬賊一人で澤山だ」、といふ標準相場を立てた、蓋し當らずとも遠からずである。

恁んな弱虫が、何人居たつて、何の駄足にならう。

一朝、馬賊が褌を緊めて掛つた日には、何の**奉天城**の一つや一つ**唾**して**取**るべしだ。**朝飯前**の仕事のみ。

四　流車中の變裝憲兵

著者の探檢旅行——第二の危險街道——人を見たら流賊と思へ——馬賊の出現——紅帽子——流兵

貔子窩の事變を聞くや、當時營口に在つた著者は、不圖、氣に掛ることを想ひ起した。

自分の竹馬の友で、或る營業の爲め、該事變地方に入込んで居る者があるが、平常必ず月に一度は、仕込み旁々營口に出て來る例になつて、此の半年が程少しも認つたことはなかつたが、今回に限つて、全二月といふもの、姿を見せない、彼の仝業者で遼東半島から來る者にも尋ねて見たが、解らない。

原來、彼の營業といふ奴が、頗る危險なる類に屬するのだから、時節柄、或は馬賊の爲めに、殺られたのではなからうか、といふ掛念が余の胸に起つた。

恁うなると、自分は一刻も放任つて置くことが出來ない性分だから、何事置いても探檢しなければならんと、幾分かは、好奇心も

手傳つたには違ひないが、急に鐵路南の方鵜子窩に向つた。著者の乘つた列車は、午後八時營口發だ、此處大石橋間も、馬賊の勢力範圍として、

第二の危險街道

と見做されてゐる、現に前夜の如きも三等客車の内から三四名の兇徒が飛出して、拙かなる金圓を乘客から奪ひ取つたといふことだ。

そして此噂が擴つた爲め、今日は乘客が、から減つて了つた、殊に夜滊車と來たら皆無といつても言ひ。

少數乘込める旅客は、皆なきよろ〳〵猜疑の眼を放つて、互に疑り合つてゐる。四方に氣を配つて、些の油斷なく「人を見たら泥棒だと思へ」てふ俚諺を、熱心に實行してゐる。

余と雖へども、固より御多分を洩れない、加之、武裝といふも驚山だが、ピストルと仕込杖とは用意してゐる。

滊車の約十町も停車場を離れて、漸く本速力が出で初めたと思はる頃、今が今まで客室の一隅に立ちづくめに立つて居、何處となく落着かない点が、多くの人の注意を集中せしめた一人の支那人が、急に身體を動かして、外衣の下から、大ピストルと取出した

『さア大變！彼れ果せる哉馬賊であつた』と愕然として色を失へる旅客の眼前で、彼は悠々銃丸を裝めるのではないか。

車中は、閑然と靜まつて、咳一つするものもなく、只最う慄へ上つて、成行を氣使つてゐるばかりだ。

然れども、ピストルの主は、別段手出しをしやうとは試みないで其儘元の外衣の下に隱くして了つた。何うも惡意を抱いて居るらしくも見ねない。

始終の樣子を見て、余は胸中不圖思ひ當ることが有つたから「成る程あれが、さうか」と獨語してうなづいた。

乘客の生命財産が安全を計るべく、警衛として、鐵道提理部より四五の憲兵を秘密に乘込ませた、そして、それが一目瞭然と正服着用した紅帽子（ほんもうづ）ではない、人目を避ける爲め變裝せしめてある。

今日何處かで恁んな事を聞いたのを、今し想ひ起せる余は推定す

るを認らなかつた、『ピストルの主こそ夫に違ひない、だが彼れ中々の豪傑者である』と。

因みに云ふ、支那人は、最も普通に、我が憲兵を『ほんもうご』と呼ぶ。即ち紅帽子で、文字の示すが如く、被れる帽子から、恁く字名を附けたもんだ。『げんびん』（憲兵）などゝ呼ぶものは、陰には無い、支那人も中々口が惡いよ。

五　青天霹靂

憲兵補助卒の注意――臨戰區域――熊岳城――ぱちくぱち――風聲鶴唳

恁んな事より外には、何事もなく、大石橋に着いた、此處より以南は、最危險線路として警戒されつゝある、武裝せる憲兵補助卒が二名、車中を巡廻し、居眠れる旅客を呼び起し、一々注意して行く。

其樣子、宛然臨戰區域にでも入つたやうで、何となく、そわ〳〵して落着かない、薄氣味惡くもあるし、一層おッ始まつたら面白からうなどゝも思ふ。

だが幸ひなる哉、天下至つて大平で、其の代り何の奇もなく熊岳城を過ぎた、此處に至るまで、乘客は、心中少からざる恐懼を懷いて、疑心百出、誰一人、枕を高くして寢たものとてはない。

熊岳城から、やつと東方が白んで、夜が明初した。

讀者！『これで旅客一同ほつと息を繼いだ』と思ひなば、甚だ早合點である。

馬賊は、決して白晝を遠慮するやうな狐鼠々々主義にあらず、

青天白日敢にて堂々と押掛くるを憚からないのだ、**夜が明**けたとて、中々**油斷**ならない。

果せる哉、窓の右手に當つて、**ぱちくぱち、ぱちくぱち、ぱらくぱら**、と轟きが連發する。

『そら戰爭だ！馬賊と兵士の衝突！、彼處だ〳〵、砲煙が見ねる』

と乘客が騷ぎ出すのに、著者も、つひ釣込まれて、外面を見ると何事ぞ、風聲鶴唳！實に馬鹿氣限つた話だ。

砲聲だと騒いだのは、**爆竹**——南京煙火——だ。附近の土人が家で御目出度があるので、お祝ひを行つたのらしい。

得て、此方の胸に臨した處があると、恁んな事にも喝されるのだ

乗人は期せずして『あゝ、まア宜かつた』と言ひ合ふ顔に、蘇生の色が浮んでゐる。

聽て午前六時瓦房店に着いた。

六　行路難

雨天——旅行の大敵——支那の道路——友人の商賈

敵は本能寺にあり、雞子窩及び其附近目掛けて、捜索の要件を帶べる自分は、瓦房店で下車して、目的地に向ふべく道を東南に取つた。

悪いことには、夜前から雲足が重く、空氣が飽和せるやうであつたが、下車せる時分、遂に雨となつた、

雨となられては一大事だ。**雨は旅行の恐るべき大敵**である

大抵の者なら、先づ旅行中止だね、流車でも、船でも平常の十分一の乗客がない。

何故さうかと云ふと、雨は道路をだいなしにして了う。道路といふものを、根底から破壊して了ふ。

さなきだに、支那の道路は、歩き悪い。往來の真中に山があり、井戸があり、累々たる石塊がごろ〳〵轉がつてゐる、凹い處へ溜つた雨水が腐敗して沼を作つてゐる、それに道筋が不規律千萬だ

畠の中でも、屋敷中でも、溝の中でも搗はない、足場の良い處、近道の處と見れば、どし〳〵通る。

恁んな風だから、天氣な日でも、中々歩くのは骨だ。馬車に乗つてゐても、瀬りにがたつき、頭を打ち、尻が痛くなり、中々樂どころではない。

それだから、雨と來たら最後、奉天、遼陽の如き大都會の往來でも、沼が出來る、深田が出來る、川が出來る、馬車の輪の半分位は、造作なく埋つて、馬の脚も半分は沒して了ふ。馬車の轉覆は、

有り勝ちだ。

運悪く、自分は今日、雨に出喰した。

馬車は、馬匹を倍加して三頭としたが、それでも出が遅い。此が誠に文字通り**行路難**と言ふのだ。

此の行の目的、友人の安否を探るのであるから、手掛りを得んため、沿道の各村落を落なく巡ることにした。

此に至つて、余は此友人の商賣柄を明かにする必要を生じた。

何を隠くさう、彼の本職は**賣藥行商**である。

この行商に就いて一寸言ひ度い事があるから、項を改めて述べんかな。

七　賣藥行商人の極惡手段

喰ひ詰め者――羊頭を掲げて狗肉を鬻ぐ――丸薬の贋造機造――賣切大皮より劣る――法外の直段

一体満州に入込んで居る幾千といふ賣藥行商の輩、皆不逞の徒で一人も碌な奴は居ない、百人が百人まで、内地の**喰詰者**ばかりだ、彼等の持てる藥と云ひ、其賣り方と云ひ、いやはや酷ひッて何たッて、到底常識を以ては判じられない。

眞面目の良藥を持つてゐる者などは居はしない。日本賣藥の信用あるを惡用し、羊頭を掲げて狗肉を鬻いでゐる。

彼等の肩から吊り下げた鞄及び若力が擔へる行李には、名も知れぬ如何はしき丸藥を、勿体なさうに袋に入れ、それに信用ある清快丸の模造レッテル、ペーパーなどを貼附せる物、或は新寶丹、眞寶丹などゝ銘打て、評判良き守田の寶丹の贋藥、或は重曹、麥粉、薄荷などを材料とせる**草根木皮**にも劣りて無効有害の**いかさま物**ばかり入つてゐる。

『霊驗があつて直段が易い』とは藥の廣告に能くあるが、滿洲の行商人が持てる藥の、無効の代りに其直段と云へば、目の剝き出るほど高い、之に就いて或滑稽家は洒落を語つた。『しやつくりを治すには藥は要らぬ、藥の直段を聞かせば、びつくり、しやつく

り留まつて了ふ』。

讀者！余は誤てり、『直段が高い』と言つたのは不適當だ。より適切に言はゞ、一定の代價がないのだ、賣る物には直段があるべき筈だが、彼等は賣るのではない。押賣り的に賣附けて、先樣次第で、取り放題取るのだ。

八　抱腹絶倒なる診斷

當てづつぽうの診斷――藪醫者より危險――頭痛に疱氣の藥――
石灰と蚤取り粉が疱瘡の妙藥――人道問題

彼等行商人の中には、眞面目腐つて、聽音器や舌當やを持つてゐて、澄まして診斷をやるのもある。と云へば、讀者は定めし『それは架空談だ、そんな莫迦の事があるものか』とけなさるるだらうが、都の眞中でさへ、無免許醫者が澤山居らつしやるではないか。

彼等の診斷は、言ふ迄もなく、當づつぽうさ！、生れて他人の脈など診つたことなどないのだから、恁んな名醫に、診て貰つた人こそ、誠に災難だ、藪醫にでも診せた方が尙々增しだ。危險々々、大危險。

疱氣の病人に、頭痛の藥を與り、頭痛に疱氣の藥を與るあゞは、尙々罪が淺い方だ、子宮病の婦人に、麥粉に薄荷を混たるを與ふるに至つては、寧ろ**罪惡**である。

かゝることゝは少しも知らず、今にも死なうといふ**疱瘡の大病人**を診斷すべく依頼し來た淸人があつた――讀者、此は賣藥行商同人間に喧傳せる有名なる逸話である――行商先生臆面なく出掛けて行つて、內用として**石灰**、外用塗藥として**蚤取粉を全治水**で濕らして與つて來たなどは、重大なる**人道問題**で、少くも**殺人犯**たるは免れない。

九　賣藥行商人の恐喝手段

五十錢一圓を施し的に與ふ――坐り込む――婦人に弄ふ――なぐる――濡手で粟――五錢で一圓――價三十錢の薄荷五百圓となる――物品の微發――馬賊より恐れらる――治政上の妨害――國賊

先づ一軒の家へ賣込みに入る、先方が『五月蠅い奴が來た、早く去つて貰はふ』と藥は要らないが、惡魔拂ひの代として、五十錢乃至一圓を出すやうな博愛慈善的に來れば無難だ。觸らぬ神に祟りなしだ。

だが、恁ういふ家は多くはない。効きもしない藥を高く買込んで、こり〳〵してゐる手合は、最う其手は喰はない。それで、新に買ふことを拒みでもしやうものなら、行商人の奥の手が出る。時代物で行かうなら、框から上り込んで、腕まくりの尻からけ、剛さうに、俱利伽羅紋々の肌を出して、痰呵を破るの凄みを演じやうといふ處。

先づ悠々と腰を下し、煙草を吹かし、茶水（つゝすゐ）を請求し、縱へ一袋でも商賣しない間は、梃でも動かないと落着き込む。其家の仕事や商賣の邪魔を爲る。物を壞す。こうすると奥へ侵入して婦人にからかふ――支那人の最も諱むところだ――少しでも氣に觸はることでも言ふと、忽ち打擲る。仕込杖を扱く。怒號り立てる。

恁んな有樣で、手の着けやうがない。少し位ゐのことには換へられないから、到頭『安いのを一袋買はふ』といふことになる。此に至つて、『恁う出て來なくつてはならないのだ』と勝ち誇つた行商は、例の膏藥の一袋を出し、精々五錢位ゐの品を五十錢とふつかける。甚だしいのは、壹元（一圓のこと）と出る。少し大きい袋は二圓だ。藥九層倍といふが。彼等の道り口では百層倍にも千倍にもなる、何しろ元價が零仝樣なんだからね。濡手で粟とは恁の事だ。

或る夏の事、

大枚三拾錢の薄荷を五百圓にした、といふ

者がある。

彼等の救すべからざる亂暴は。獨り之に止まらない。到る處、鷄を徵發する。豚肉を强奪する。鷄卵を横領する。宿賃を拂はない——必ずしも拂はないのではない、例の二束三文の藥袋で强制的差引をするのだ——といふ始末だから、彼等の過ぐるところ、人目を側む。

可哀相に土人は、戰勝國の民に對して、些の抵抗は試みないが、其の心中、如何に殘念に思ふだらう。何んなに腹が立つことだらう。蛇よりも、蜈よりも、更により多く此等の惡商を嫌つてゐるに違ひない。

或村落へ行くと、好みを馬賊に通じ、少しの賄賂を贈つて、日本藥商の侵入を防いで貰つてゐる處がある。

恁んな處へ入込まふものなら、夫こそ飛で火に入る夏の虫だ、反對に飛んだ目に遇ふ、命さへ險呑だ。

だが、事に馴れた者共は、村の入口の樣子で、馬賊の有無を見て取るに巧みだ。

此を以ても、彼等が如何に土人から嫌はれて居るかは解らう。

此書の著者は最も眞面目に世間に告白ぜんとす

我が守田、岸田、盛大堂其他の眞正なる賣藥商が、根氣善き多年の忍耐と、幾多の資本を投じて、漸く擴張せる販路を、片端より荒し回はり、苦心經營の結果僅かに得たる我賣藥の信用を、どし〳〵地に落しつゝある彼等行商、

仝時に、爲政官が、微頭微尾、懷柔主義を執つて、土民を手馴けんと熱心せる、直ぐ其傍より、叨りに恐喝手段を斷行して、當局者が百年の方針をぶち壞し、土人をして我が眞意の存する處を疑はしめんとせしめつゝある彼等行商の徒は、

商業の發展上、爲政の方針上、片時も助け置くべき代物に非ざるを。

あゝ彼等は倶に天を戴く能はざる國賊である。

一〇　飯店の慘劇

奸商羅の流せる覆面の毒害――馬賊の噂さ至る處に藉々たり――飯店の説明及び支那に於ける寢具携帶旅行の風――馬賊日本人の頭顱を粉碎す

我が友人も賣藥行商を職とせることは、既に告白した通りである が、温厚正直なる彼は、群鶏の一鶴だ、多くの同業者と、全く其撰を異にして、最も眞面目の態度を執り、正々堂々、少しの後暗き所業なく、正路に行つてゐる、營口は回天堂、長壽堂などの老輔から、全く正明正物を仕入れて、賣捌いて歩くが、時非なり幾多の奸商が、さんざ、荒し拔いた揚句、日本の賣藥に不信を置かしめた今日、土人等は糞も味噌も一處にして了つて、いくら本物を持つて行つても賣れ口が遠くなつた。奸商羅の我商業に惡影響を及ぼすこと覿面此の如きものがある。それは偖置き、友の身上は何うなつたらうか。

尋ね行く村々、何處でも馬賊の評判ばかり囂すしい。少しく財産を持てる者は、城壁の設けある市街に住める親戚に、金圓は勿論目星しき物品を預ける、女小供を逃がす、夜番を置いて警戒する今にも戰爭でも起らうと云ふ騒ぎだ。

行き〳〵て、丁度五ッ目の村であつた、足休め旁々、飯店に立寄つた。飯店は清音で「ふあんてん」で、我が一膳飯屋兼木賃宿である。

支那では、此の下等の宿に限らず、一般の客棧（かうさん）總て客夜具の備へがない。「夜具蒲團御持參あれ」といふ始末だ。旅客は何處へ行くにも寢具を携帶しかければならない。不便至極ではないか。それも大名的に、眷屬數多引率してのことなら宜いが、自ら肩へ被いで廻るのだから体裁も宜くはない。

我が寄つた飯店は、天勝軒と云つた。專ら苦力を顧客としてゐる泊りと飯代とは別で、飯は必ずしも其處で食るには及ばない仕組

にしてある。

更に又、夜間寢る丈けに廂のみ貸すのもある。

今し著者が、此飯店の入口を屈り、食卓に向つて、腰を下すが早いか、其處に居た四五人が、行きなり余を取卷きて、次の驚くべき悲慘なる珍事を語り初した。

『一昨夜、馬賊が此飯店を見舞つた。丁度泊り合はした日本賣藥行商人と其苦力が枕を駢べて熟睡せるを伺ひ、巨大なる斧を揮つて、酷たらしくも、主從の頭を、微塵に打壞し、數百圓の賣上金と荷物とを奪ひ去つた。』

悚然しながら、此の恐ろしき話を聞いて居た著者は、此の憐むべき遭難者が、若しや、我友田口にあらざるやと疑つたので、姓名や、人相体格の特長などを尋ねたり、聞いたりした結果、最も確かに其人に非ざることを知り得たるのみならず、余が尋ぬる其人は、『約半ケ月以前、此飯店に一泊せることあり、そして岫巖を經

て連山關指して出發した』といふことまで明かにするを得た。

彼れ遂に連山關に行けるか、一大事だ、彼處は馬賊の巢窟だ。そを、彼れ、知つてか知らずにか、無謀究つてゐる、彼の安否益々心元ない、急に追躡するの要を感じたので、貔子窩に於ける馬賊數擊後の光景を實見せんと欲する余の豫定を翻へし、直ちに引返へして、鐵路更に遼陽に向つた。

遼陽からは、徒行して安東縣街道を進み、湯河沿を經て、漸く目指す連山關の前に、屏風の如く横はる摩天嶺の麓に着いた。

一一　深刻極まる復讎

奇拔なる摩天嶺(?)――文學思想――臨終の言――二度と人手に渡すことはならん――犬死が何で國家の爲めにならう――墓がぶる〳〵と動く――無念の囚まり――羅漢を咀ふ――日本軍の先導――

摩天嶺！何たる奇拔なる名であらう。峨々たる奇峰峻嶽天外に貫き、蓊々たる老杉古松雲表に登り、一度此山に對へば、其威嚴に慴服して、如何ばかり宗教心が湧くであらう、或は其雄壯なる靈

感に觸れて、偉大なる詩的思想を浮ばしむるであらうと思ふ。

自分等樵骨にして、文學に縁遠き俗物を以てしてさへ、摩天の名を聞いて、一種の聯想を逞うするに至つた。寛大なる讀者、翼はくは、暫く非文學者が文學思想(?)に傾聽し玉はらんことを。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

摩天嶺は、過ぐる日清戰爭に於いて、稀なる難關であつた、流石精悍無比なる日本軍も、此處では渺なからず手古摺つた、ともすれば旗色が惡い。『恁んなことでは可かん、一歩も退いてはならん一氣に攻め掛れ』と奮鬪又奮鬪、惡戰又惡戰、遂に屍の山を築いて、辛うして敵を退けた、此等殉難の勇士が紀念として殘れる土饅頭は、今も尙過ぐる者をして暗涙を催さしむ

まこと、當時の苦戰の狀は筆舌に悉し難い、決死の士は皆誓つた。

「我等が死ちゝければ、此山を落すことは出來ん、其代り一度落した以上、縱へ如何なる事があらうと再び人手に渡すこと

はならん」

と堅く誓つて討死した。

然るに何事ぞ、此等勇士が墳墓の土、未だ乾く間もなくに、三國干涉の結果とあつて、遼東半島諸共に、みすゝ此摩天嶺をも取回さるゝ仕義となりしこそ是非なけれ。

事こゝに至つて、彼等忠勇なる將卒が臨終の誓は反古となつた。尊き彼等が討死は可惜犬死となつた。

世にも貴き生命、惜まるゝ玉の緒、望みある身、妻あり子ある身体を、甘んじて捨てたは、抑々何の爲ぞ、あゝ何の爲ぞ、國家の爲めなればこそ、可惜一身を犧牲に供して悔ゐなかつたのだ。

然れども、犬死が、何で國家の爲であらう？　名譽の戰死であらう犬死！のたれ死！これが殘念でなからうか、無念でなからうか、彼等勇士の墓はぶるゝと顫動した。

『口惜しい』と思ふ彼等の一念が凝り固まつたのであらうか、其

後からといふもの、彼等の奥津城あたり、雨降る夜半には鬼火が飛び、風荒ぶ日には魔通ふ。

さなきだに、いとゞ悽愴たる此邊りの光景は、一段の悽愴を加へた。空行く雲も、いゆき憚り、谿間に山鳥の聲絶ねた。豈すら恐れて旅人の登るものとてはない。

摩天嶺の名は、遂に魔天嶺と稱せらるゝに至つた。

勇士が、深く骨髓に徹したる無念は、遂に復讎心となつた。胸を破めた傷が深い丈け、それ丈け復讎も深刻でなくてはならない。

平凡なる復讎では腹が癒ない飽まで深刻なれ」と新たに彼等は幽冥裡から誓つた。

執着く露國に取附いて、出來る丈け祟つて、意趣返しを爲なければならんと着手した。

先づ「死」の手を延ばして、主權者を鷲掴みに掴み、それより、官僚の頭腦に入込んでは、極力强壓主義を勸誘し、革命黨の心裡

に忍び入りては、瀕りに暗殺を鼓吹し、農民には、矢鱈に動亂を煽動した。

或は又、當局者を口説いて、將來に忝しく日本に捧げしむる爲め大連及び旅順に建築し、鐵道をも設立せしめた。

「時分は宜し」と「復讎心」は戰爭の采配を引いた。

そして戰鬪中、絶にず、日本の陣頭に立つて、先導をしてゐる、殊に其根據地とせる摩天嶺に於いては、風雨を指揮して、猛烈なる荒れを起し、露軍を未だ戰はざるに全滅せしむる底の痛快事を演つた。

一方に於いては、敵將間に離間策を放ち、不和を生せしめ、厭病風を吹き込んだ。

堅忍不拔の稱ある旅順の守將には、降參風を吹き送つた。

恁くの如く、勇士の英靈は、摩天嶺の蔭より、露國を呪詛すると仝時に、八面六臂的辣腕を揮つて、極力祖國を加護し、能くし能

ふ丈けを盡せりと思ふや、からく〳〵と笑つた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

恁ういふ趣考だ。何せ、腐淺で、面白いこともないが、只恁んな取留めのない事でも想ひ浮べて、摩天嶺の如何に趣味に富めるかを想像したのである。

一二　摩天嶺

平凡なる摩天嶺――馬賊の根據地――奉天將軍の苦惱――馬賊の天下

恁かる空想を抱いて、早く雄偉なる峨嶺の姿を仰ぎ見度しと、瀬りに急ぎ來りし自分は、李家舖子といふ處から、眼前に展開せる摩天嶺を望み見て、失望せずには居られなかつた、平々凡々なる普通一般の山と何等撰ぶところがないのだ、奇拔な点崇嚴らしき个處などは爪の垢ほどもない、誠に詰らない山だ、自分の想像の驚々しかつたのは莫迦〳〵しかつた。

此山は近來、馬賊の根據地となつて、此邊より連山關は彼等の巢窟となつてゐる。

十月上旬の萬朝報に『遼陽以東の馬賊』といへる見出の下の次の如き報道が掲げてあつた。

『滿州一帶高粱の繁茂せる昨今、馬賊の猖獗を極めるは今に始めぬ事なるが、遼陽以東連山關を中心とし、摩天嶺より、東北は懷仁、通化の方面に亘り、最も跋扈せるは、洋二虎を首魁に頂く一團なるが、其團結の堅きと、範圍の廣大なるとは、常に奉天將軍を苦惱せしめつゝあり。而して一旦討伐に向ひて、之を殄滅せざる時は、其反抗の度は一層激甚を極むるが故に、今や將軍も容易に手を下さず、洋は將軍の逡巡するを奇貨とし、前記諸方面に亘り盛んに草賊的行爲を擅にし云々』

此記事は、該地方に於ける馬賊の勢力を、有りの儘書いてゐる。

恁くも將軍すら彼を憚つて高手的態度を執つてゐるのだから、洋

等の狐鼠推測るべしだ。此方面は全く彼等の天下だ、無政府だ。

暗黒世界だ。

彼等の部下の一隊は、摩天嶺を根城とし、網を張つて旅の鳥を待ち望けてゐる。

一三　東海道、箱根、雲助

安東縣街道――沿道皆麻の灰

摩天嶺は遼陽より安東縣を經て、韓國義州に通ずる本街道の上に横はつてゐるのだ、此街道を我**東海道**に見立てれば、遼陽は靜岡、李家舗子は三島、そして連山關は**小田原**で、摩天嶺は**箱根峠**に當る。

摩天嶺や此道中やに出沒する草賊は、取も直さず**雲助**乃至**護麻の灰**と云つたやうな工合だ。

最う少し細かく言ふと、今や此沿道の民衆つて馬賊である。馬賊といふ程大袈裟のものではないが、高粱時代が來ると、皆馬賊の手下となつて、旅人を苦しめる。

百姓兼草賊、乃至、苦力兼護麻の灰が彼等の職業と化る。而も全じ組合の内々では相侵さない、其處は默契が成り立つてゐる。

一四　官兵兼馬賊

昨は官兵今は馬賊――馬賊上り

昨日の官兵、乍ち今日の馬賊となり、今日の馬賊、明日の官兵と化るは、珍らしくない、都合次第で何方にでも轉任自在な重寶な奴がある。

是等の中には、兼業せるものあり、一方の足を洗つて、他方に首を突込むもある、滿洲邊の官兵で、少し腰が強く、鼻息の稍々荒いのは、大抵馬賊上りだと言つても可なりだ。

序に馬賊に就いて尙少しく語らしめよ。

一五　旅店と馬賊の關係

客棧に斥候を派遣す――旅店馬賊に通ず――客棧旅馬賊羅

馬賊が金滿家をあさることは既に記せるが、旅客に對しても、頗る注意を拂つてゐる、目星き客棧々々に斥候を忍ばし、如何なる客が泊れるか、如何なる客が、何日何處へ出立するか、洩れなく探らしむる。

客棧の中には、馬賊に氣脉を通じて、旅客の往復を彼方に內通する不埒な奴も尠くはない。

驚くべきは、客棧その物が馬賊なるものさへある。恁んな處へ泊れば、助かることは出來ない。

一六　旅客追剝ぎ權の賣買

旅客の讓り渡し――彼等の眼力は遠はない

賊の仲間の間に『旅客の讓り渡し』といふ取引が行はれる。

恁ういふ按配だ、彼等の一人が、善い鳥を見附て、其後を尾けたが、何分手を下す隙がなかつたので、次の立場にうろついて居る中間に、其鳥を讓り渡すのだ。

『彼の懷中は、五百兩は堅い、百兩で賣らふ。』『よし買つた』てなことを云ふのである。

彼等が一癖ある眼力で睨んだ旅客の懷中は、恐らく外れつこない不思議だ、中らずと雖へども必ず遠くない、彼等の眼光、エックス光線ならなくも、經驗の力こそ恐ろしけれ。

斯んな風で、一度護麻の灰に見込まれた旅客は、斃るるまで逃れつこない。

一七　咄！失踪軍人

行衛不明軍人の辨護――卑怯なる失踪者一人あり――彼を慚死せしむ――廣島師團輜重兵と稱す――所罰を恐れて逃亡す

寧ろ、不名譽とも云つべき失踪者として暗に葬るべきか。

將、名譽ある戰死者として行賞中に加ふべきか。

こは出征軍人に對する論功行賞の時に際して、朝野を騷がした議論である、當局者の意志が前者に傾けるものゝ如しと洩れ聞きたる新聞社會は、盛に彼等を辨護して、我忠勇なる軍人に決して一人の逃亡者なきを主張した。我愛讀せる萬朝報亦再三再四論する所ありき。そが九月二日の言論欄には左の一老兵の寄書を掲げた

陸軍々人は海軍々人と異なり艦隊の如き局限せられたる一小區域内に、しかも常に指揮官の眼前に在つて動作するものにあらず、時に或は斥候となりて敵營を窺ひ、或は傳令として山野を潜行す。其の間、或は數人なることあり、或は全く單獨なることあり、此時に際し不幸にして敵の襲ふ所となり、其逆手に斃るゝことあらば如何に勇敢なる行動をなし、日本武士として、如何に立派なる討死をなすも、誰か能く之を認識せん、而して遂に徒らに不名譽に近き失踪者の取扱ひを受く、怪に至りて死屍を發見せらるれば尚ほ幸ひに戰死者として報告せらるべきも、然らざるものは遂に永劫其名譽を稱揚せられず、論功の議に上せらるゝ能はず云々

然り交戰の苦難、混雜、行衛不明者を出す決して無理ならぬことである。而も一人の逃亡者あるべからず、又なきことを確信して疑はざる自分は、李家舖子に來るに及んで、圖らざりき、思ひも寄らざる事實を發見して、自分の確信に一点の瑕を附くるに至らうとは。

意外！實に意外ーかゝることあるべからずと信ぜし度の深きに連れて、驚きの度も深かつた、我が泊れる宿屋で、怪しかる噂が耳に入つた。土地の軍役所に、日本の小大人、即ち下士が居るといふのだ。

どうせ土人の言ふこと、信僞の程は解らないが、訪ねて見やうと余は出掛けて行つた。

軍役所とは言へ、何も別に嚴かしい構があるのではない、土塀の破れて自と門をなせる所に兵士が立番してゐる兵營は普通の借長屋建に過ぎない、人員も精々百人居る位ゐのもの、此兵營で兵馬

の大權は勿論、町内の取締り即ち警察權を握れるのみならず、行政の一機關となつてゐる、最も何んな邊鄙へ行つても收稅掛りは別に設けられてゐる。

今し自分は、此の門に行つて、『日本の大人が居るならば』と面會を求めたが、『沒有』即ち『居ない』と反ねつけられた。けれども其の樣子が何となく、有るものを隱くさんとする風が見ゑるから、試みにかまを懸けて見た。即ち『自分は該日本大人とは朋友の間柄で、今日は彼の故郷からの來信と、彼が自分に依賴せる大切な買物を齎したのだ。彼は定めし待遠しがつてゐるだらう、そんな事を話し爲ては居らざりしや。』と言葉巧みに問ひ落すと、番兵先生釣り込まれて『さうです、日本大人は屢お國のことを口癖に話しなさる』と語り出した、余は箱を番兵に與れて與り、通用門を通して貰つた。

案内せらるゝ儘に、づか〳〵入つて行つた室が、丁度日本小大人の部屋だ。勿論彼の獨占するのではないが、折から彼一人であつた。頭は散髮で、支那の曹長の制服を着けてゐる。

彼は、頗る怪嫌の顏して余を案内せる苦力を睨んで『何故日本人を連れて來たか』と言ふかの如き意を示した。彼の樣子、何も人に逢ふのを避けて居るらしく見ゑる、何處かに秘密がある身体らしい。と見て取つた余は、一應の挨拶終るや、隙さず『貴方は、噂通り、失踪軍人ですか』と單刀直入的に切り込んだ。

彼の顏色は、見る〳〵變つた。警吏に看破られた掏兒のそれのやう。唇まで眞蒼白になつた、もう物も得言はない、恐らく彼は、余の爲めに急所を抉られて慨死したのではなからうか。

彼の顏は、更に赤くなり又蒼白く化る。或は懼れ或は恥づる胸中の苦悶が現はれるのだ。

自分から口を破つた。『君、全くだらう、隱すには及ばない、僕だつて苦勞人だ、解らんことは云はないさ、次第に依れば、隨分全

情を寄せないものでもない、何ういふ動機で、斯うなつたか話し玉へ。』

彼も漸く落着いたと見へ徐々に語り出した。『さう言はれゝば益々恥ぢ入るばかりだ、まア懺悔話を聞いて呉れ玉へ、僕は今日非を飾らない。失踪するに至つた理由を率強附會ることはしない。今考へると、何故あんな莫迦な事を爲たかと思ふね

輜重兵

であるが、丁度去年の今頃だ、或晩の事、衛兵に選ばれて、一時間ばゞ門番を爲てゐると、心に寛みがあつたか、畫間の罷勞が出たか、立てるまゝ、うと〳〵、と居眠りをした。此が失策であつた、折から高粱の蔭で伺つてゐた馬賊が突如飛出して、自分の不意を襲ひ、行成り、銃と丸を引たぐりに掛つた、此方は癡惚けて、まご〳〵爲てゐるから、抵抗しても敵はない、到頭〳〵爲てやられた。油斷して飛んだ目に遭つたと悔んだが、最う仕方がない、戰時職務怠慢の罪で、酷い目に合はせられるは、知れきつて

廣嶋縣

の者で

ゐると、塞き込むと、故郷の事なども想ひ出されて、急に兵隊が嫌になり、ゐゝ儘よと、其儘姿を晦ましたのだ。今では、頻りに悔悟してゐる。其時直ちに自首して出た方が、反つて良心の苛責が輕かつたらうにと思ふ、寧ろ死んで申譯を爲やうかと思ふ時もあるが、さうも行かないものさ。』

彼の言を聞いて、忠勇なる我軍人の中に、何うして斯んな腑甲斐ない卑怯者が居つたらう、驚かずには居られない、多少恕すべき点でもあるなら格別、自己の不重寶から招ける所罰を恐れて、逃出すなんて、呆れ返つて了ふ。

否々、斯んな卑怯な奴の言ふことは、一言でも當にはならない、廣島といふのも何だか解つたものではない、乞度、生命が惜しくなつて、哨兵に立つた時、銃を持つた儘逃げたのに違ひない。露すけには斯な奴が隨分あつたもんだ。全く夫に違ひない、と自分は考へた。

で自分は、『畜生！國賊！軍人の面汚し、腹でも斬つて死んで了へ！』と一喝して、面に痰でも吐き掛けて遣り度かつたのであるが場處が場處だから、治まらぬ胸を抑へて、何氣なく挨拶して此失踪軍人と袂を分かつた。

一八　馬賊保險の手形

盜難除けの護符――大手振つて行ける

今や著者は、馬賊の縄張り内に入込んで居るが、少しも臆することなく平氣で居るといふものは、心に自信があるからだ、盜難除けの護符が有るからだ、事實を言へば、『馬賊保險の手形』といふ無類極まる旅行券を、肌身離さず附けてゐるからだ。

自分は嘗つて溝割子に居た時、馬賊團長の一人から此手形を貰つて置いた、何な物かと云へば、何まことに詰らないものさ、破れ易い唐紙の片平に『此信所持者は侵すべからず』といふ意味な文言が書かれてあつて、主領の署名がしてある。

馬賊といふ奴は、仲間仁志甚だ義の堅いもので、互ひに信用を重んじてゐるから、此の書付さへ持つて居れば、大丈夫だ。何處でも大手振つて歩ける。

生ひ繁れる高粱の藪から棒に、暗打ちさるゝか、遠くから飛道具で行られない限り、大抵の馬賊に出遇つても手込みに逢ふ氣配ひはない。

これ余が單身危險地に深入して、毫も恐れざる所以。

一九　馬賊村、保險税

仝村悉く馬賊に加入す――共同組合の保險税

馬賊保險手形は、著者に取つて多大の便利を與へたが、茲に又、馬賊の害を免る爲め、一村仝家悉く馬賊に加入するのがある。其村にある家といふ家、戸主に非ずんば長男次男、一軒に一人は必

す馬賊の群に首を突込んでゐる、斯うして置けば、其村だけは災難を逃れる。苦しい策略だけれども、考へたものだ。

或は又、村内に共同組合を設けて、毎家多少の出金をなし毎月馬賊に贈つて、村を荒らさるやうに依頼する。馬賊の方でも、それを例として、保険金の積りで徴發に來る、宛も正當に上納すべきものを上納し、収納すべきものを収納するの觀がある。政府以外、更に一個の**別政府**があつて、租税を取り立つるに等しく、二重の重税を課せられて居るのだ、世界豈に清人ほど苛税に苦むものあらんや。

二〇　危機一發

廣天嶺山中馬賊に出遇ふ――發砲――喇叭の音――危急を助かる――官兵賊の術中に陥る

さういふ間にも自分は、田口のことを忘れたことはない――田口とは我が友賣藥商であることは讀者の記憶に新たであらう――此處

彼處探し扨いて、遂に連山關を捜索すべく摩天嶺へ差掛かつた。

平凡で、自分を失望せしめた嶺ではあるが、流石山が深いから嶮しい處もある、小山の直下を通つたり、原を横ぎつたり、稀には畠があつて高粱や粟などの作つてある傍を通る。

物騒だといふ評判が立つてゐるから、通り人はない。で稀に行交ふ人に會ふと、互ひに追剝ではないかと思つたり、野邊に耕す農夫を見ては盗賊に早變りしまいかと思つたりする。

段々行くと、山と山とが双方から迫まつて來て、道が極く狹くなつた、何だか薄氣味の惡い處であると思へる折しも、行手の方から五六の騎兵が進つて來るのが見える、余は直覺的に「適切馬賊だ」と感じた。我馬車の馭者も色を變へて「彼奴惡い奴です」と言つて馬を停めた。

一寸斷つて置くが、此頃の馬賊騒ぎで、此峠の馬車は留つてゐるのを、自分は無理に引張り出したのである。

馬賊の一人は銃を放つた。けれど空砲らしかつた、察するに余を脅かしたか、さもなくば何かの相圖なのだらう。

余は例の護照を懷中してゐるから、恐るゝことなく、最も落着いて、彼等の爲さんとする所を眺めた。

彼等はぼつ〳〵進んで來て、早や四五十歩とは隔たらない。

愈々危急が近づいて來る、自分は益々落着き拂ふ。

折から、彼等の背面に當つて、一節の喇叭の音が聞ゐた。

彼等は頗る驚けるものゝ如く、余を見捨てゝ、馬首を回らし走り去つた。

喇叭の爲めで、自分は危き場處を逃れたが、何だらうと訝つたが程なく解つた。官兵が馬賊の一部隊を追擊して、向ひの山陰まで進つて來たのだ。

我を要せし一隊は、此樣子を見て、官兵の少數なるに乘し、密かに其側面に回り、不意に突いて出やうと工らんだのだ。

恁かることゝは夢にも知らぬ官兵は、佯り逃くる賊を追ひ、勝に乘じて、知らず識らず敵地に深入りした。側面の高粱叢中に伏して待ちたる馬賊は、時分を測り、筒先揃へて、一齊射擊を行つた。

寢耳に水、官兵の驚きは非常だ、富士川の水禽が飛立つたごころの騷ぎではない實丸がどん〳〵飛で來るのだから堪らない。瞬く間に四五人は丸に中つて落馬する。此は敵はじと一同逃げ出す後より、一人も殘さずと馬賊が追掛けて去つた。

二一　山中の一夜

金滿家の宅に泊る——馬賊より使者來る——神醫免生

馬賊騷ぎも無事に濟んだが、日のある中に、此峠を越して連山關まで行くことの難きを知つて、自分は峠半ばの丁家舖子といふ小村に泊ることにした。が、宿屋とては一軒もないので、物持者と思しき家へ頼み込むと、『馬賊の危難さへ承知なら』といふ條件で

足を延ばす處を得た。

少しも田口の事を忘れざる自分は、此處でも賣藥商の來否を尋ねたが要領を得ない、近頃日本人は餘り來なかつたらしい。

日が暮れて暫く經つと、『日本人が居るか』と尋ねて來た三等卒がある。

『馬賊に尾けられたな』と思つたが、自分は例の通り『何慾くことはない』と澄まして落着いて居た。

一寸説明の必要を認める、三等卒とは耳隙りの語であるが。清國には、二等卒の下に尙一階級の兵がある、兵であつて苦力の働きをする。そして月に八圓位ゐの手當を貰ふ、此は誰れでも志願さへすれば、直き爲れる。また何時でも辭められるのだ。

今來つた三等卒は、余の許へ進つて來て、存外温和しい口調で語る所を聞けば恁うだ。彼は直ぐ近くに住める某大人の苦力である。今しも主人の言附で、自分の處に賣藥を求めに來たのだ、其の事

情は、數日前、其主人の友人が急病で九死一生に苦んで、誰れも手の附けやうがなく困つてゐる處へ折宜く表を通り掛つた日本賣藥商を呼込んで、投藥して貰ふと、彼れ神醫でもあるのだらうか、藥が非常に利いて、さしもの急病忽ち紙を剝いだやうに愈ねた。大人甚だ之を德とし、『命の親』を以て此の賣藥先生を遇し、彼れの固辭するを强ゐて、厚く酬ゐ、且つ先生の歸る際は護衛を附けて送つた、恁く日本賣藥の靈驗を認めた大人は、更に余に藥を求めに寄したのだ。

彼の話の進行中、彼れの頭の頂点から足の先まで見拔いた自分は、彼奴馬賊の使者だ、彼れの主人は馬賊に違ひないと睨んだ。だが彼の所謂神醫先生果して何人だらう。我友田口に非ずんば、恁ういふ手際は出來る筈がない、田口らしいと思つたから、此使者に尋ねた。名は知らぬと答へた。仕方がない、彼の主人に會つて尋ねやうと此苦力を介して面會を申し込んだ、全時に余の常備藥クヰ

ロダイン一瓶を與へ且つ告ぐるに馬賊の護照を有するを以てした。待つこと半時ばかり、苦力は再び來た、余の申込みに對する快諾と、林檎一籠を持ち來つたのだ。で然らば翌朝訪問すると返事して遣つた。

三　馬賊と語る、革命家

朱鳳山の人物――少壯氣鋭――陳勝吳廣の卵子――馬賊となれる理由――父の仇を酬ゆ　良民を犯さず――金を銀行に預ける――志小に非ず

翌朝余が尋ねて行つた馬賊の主領は、邸宅頗る巨大なる構をしてゐる。近傍では彼を尊稱して大人と言つてゐる。成べく世間から怪しまれぬやう其部下を廣く近村へ撒布して忍ばせて置いてある。名を朱鳳山と言ひ、南清の產だ。語つて見ると、彼中々人物だ、物が解つて、はき〳〵して、腹が大きく、磊落で、決して城府を設けない、露骨的で、ざつくばらんだ、一体に愉快な好漢である。年齡は漸く四十前後で、血色の宜い、生々した顏をして、格腹は

宜く、身丈は大きい、豪商の息子だ、小さい時分から所謂少壯氣鋭を喜ぶ底の氣前があつた。義俠心に富み、强きを挫き弱きを扶け、町内の巾利であつた、それで瀕りに時事を慨し、清朝殺すべしなどゝ盛んに氣燄を吐く――陳勝吳廣だとか、乃至項羽劉秀なども、初めは悉んなやうな若者頭であつたのだらう、これが成効すれば漢の高祖となり、天下の覇となるのだ。

我が朱鳳山が馬賊と化つたには理由がある。

或時彼の親父は、何か嫌疑を蒙つて縲絏の身となつた。固より無辜なること明かであるのだが、當局者へ賄賂を送るか、代りの咎人も出さずんば放免の恩典に與かることは急ではない。原來支那には妙な風がある、其筋から嫌疑を受けた者があると、夫が冤罪であるならば其親戚故舊相集り、百方捜索して眞の罪人を突出して、茲に初めて嫌疑者の放免を求めるのだ、或は又眞の

犯罪者と雖へども賄賂を贈つて免るることは珍らしくない。

傲骨なる鳳山は、父の罪を償ふべく、そんな莫迦な事はしない。反つて當局者が腐敗を攻撃し、反抗の度を加へた。悲しむべし、

その中に父は牢死した。

これで、肯かぬ氣の彼、何で默つて居られやう、父は當局者が手を下して殺したも仝樣であると激昂し、單身衙門に乘込み、役人を打斬つて、意趣を霽した、其夜彼は其處を出奔したが、「江東の」子弟、彼の爲めに死を誓ふ者數十人あつた。

鳳山は此等の若者を手下として、遂に馬賊となつた。これ卽ち彼が今の身の上となつた理由であるが、彼が主義として決して叨りに良民を苦しめない、馬賊の假面を被れる草賊とは其撰を異にし主として公衙を襲ふのである、乃至因强の聞ゐある富豪を脅かすのである、其遣り方、義賊に近い。

彼が今日まで奪ひ得たる金額凡幾十萬と云ふを知らないが、何に

費つたらう胸に一物ある彼は叨りに浪費しない、種々な姓名を以て悉く四五の外國銀行へ預け入れて置く。是果して子孫の爲に美田を買はんが爲めであらうか、抑々又他に何か深き意味があるのであらうか。

余と相語る中にも、彼が氣燄萬丈の虹を吐いて、中々傍へ寄附れない、彼は清國が將さに實施せんとせる立憲政体を糞の如く罵倒して居る『立憲政体は自分で自分を縛しめるやうなものだ。一朝大人物が出現して、其鉄血政略を斷行し、鞏固なる意志を遂げんとするに、彼んな面倒な物があつては左支右吾、思ふ事が存分出來ない、清國今やビスマークの手腕を有する第二の康有爲的人物を要するや切なり』と一氣に述立てる。

彼の理想する人物は、ビスマークと康有爲である、彼の意志知る可きのみ。自分は彼を稱して、義賊と言つたが、更に革命的馬賊と改稱するの適當なるを見る。

自分は今日鳳山の氣候を謹聽すべく來たつたのではない、田口の事で來たのだから最日の神醫先生の事を尋ねた、案に違はず彼田口で、其後遼陽を經て營口に向つたといふ事が解つた。

恁くの如く、行違ひになつたとは雖へ、彼の行先を明かにし探檢の目的を遂けたから、順路營口に歸つて此行を終へた。

二三　日探露探の混戰、秘密輸送

中立地――日探露探――日本馬賊――馬賊司令官利根河少佐(?)――戰時禁制品の大輸送――

錦州通過の秘計

營口は既に我に占領したが、猶未だ奉天を陷れざる間は、溝幇子錦州を含める遼河以西一帶の地に、我が勢力は行屆かなかつた。

新民屯を通して露國が勢力の手を展すに委せてあつた。

此邊り、清國より中立地たるべく宣言されてあるから、日露兩國の戰鬪隊は一歩たりとも蹈み込む事は出來ない、戰時禁制品は一品なりとも輸送する能はざる規定である、苟くも此に違ふことあらば、忽ち中立違反といへる抗議が申込まれやうといふんだ。

それで中立地に於ける要處には、陰に陽に日探、露探が必ず入込んで、鵜目鷹目互に秘密を探ぐり出さうと眼張りこして鎬を削つてゐる。

彼等互に馬賊に贈賄し、此を手馴けて利用するを拔からない。或は特に馬賊の猟立部隊を編成して爪牙としてゐる。

錦州に於いては、清國通を以て有名なる利根河陸軍少佐(自稱?)關帝廟内に本部を設け、盛んに馬賊を集中し自ら棟梁の采配を揮つて居る。

西田石井兩憲兵曹長(自稱?)は、機敏なる清人と共に日探に從事してゐる。

溝幇子にありては、白澤中尉(自稱?)專ら馬賊を操縱し、白井特別任務日探の事に當る。

露國として、此にも優れる用意が設けられてあるのみならず、沿道

の各鐵道驛長に、尠なからざる運動費を撒布いて、其味方に附け天津より山海關、錦州、溝幇子の中立地を經て、幾多の禁制品を新民屯に流車輸入を行つてゐる、日探が屢々此事を發見して其都度抗議を申込んだのも尠なくはない。

日本側に於いても、遼河結氷し、天津より營口に需要品を輸送するは、此關內外鐵道に依らざるを得ざる場合となつた。

折しも我が實踐社は〇〇〇〇〇より防禦材料調達の急命に接したので、自分は飛ぶが如くに天津に走り、夥多の鐵線、亞鉛板、釘、材木を買入れた。

處が、恁かる禁制品中の禁制品たる物資を、如何にして中立帶を通し、無事に輸送するかは難問である。

掛り〳〵へ無慮小千圓といふ賄賂を贈つて、三十噸貨車二十臺を借受け、夜半手取り早く積込んだ、鐵線、亞鉛板等は下積となし材木を其上に積み、更にアンペラで蔽ふた。そして支那人の名義

を以て木材の送り狀を取つた。

幸ひ露探の目にも懸らず、鐵道監督からも苦情が出ないで、我貨物列車は特に臨時に天津を發して、何事もなく山海關に着いた。

翌朝更に發車して恰も正午錦州に着いた、此處まで來れば天津營口間の四分三を過ぎたのであるが、殘る四分一の道程が難關である、殊に錦州、溝幇子はやかましい驛である。

前にも述べた此等の驛に網を張れる露探日探は、汽車の發着毎に停車場に來つて、客車と云はず、貨車と云はず、根こすに檢分して、少しでも怪しい人物、品物と見れば、どし〳〵差押へるか、注意物として行く先々の驛へ警告の電報を發するのだ。

加之停車場監督として控へたる一二名の英國人が、注意深き眼を以て、其任務に遺漏なからんを期してゐる、此くの如く注意周到に、警戒嚴密に搏へてあるから、到底尋常一樣の手段では、彼等の眼を掠めることは出來ない、此等の注意を他方面へ轉せしめて

置いて、其留守に通り抜けるより外に策はないと、自分は豫め其事を錦州に於ける利根河少佐に依頼して於いた。

少佐は余の依頼を受けて畫策するところがあつた。即ち彙て同地に於いて、露人が新民屯に送るべく購求せる生牛數百頭の某處に隱蔽せられあるを探知してあるので、今朝部下を派遣して、牛群を襲はしめた。

果然、幾多露探の注意は其方に集中した。

加之、西田曹長は停車場に於いて一波瀾を起した、外ではない、新民屯行列車の中に馬糧を積めるもの數臺あるを、禁制品として驛長及び監督英人に抗議を申込んだ。

恁くの如く停車場及び其近邊が、摺つた揉んだ混亂して居る間に禁制品を滿載せる我貨物列車は、まんまと錦州を發車することを得た。

これで第一の難關は通り抜けた、前途に尙溝幇子と云へる第二の難關が控へてゐる、辛うして虎穴を出でゝ更に虎穴に入るのだ。

思へば中々氣が氣でない。

二四　秘密の暴露

淺幇子にて輸送差止めらる――千弗の賄賂効なし――

溝幇子では、本當に手古摺つた、策の施じやうがなかつた。白澤馬賊、白井特務の助力も以てしても如何ともする能はず、百計盡きて、進退谷まつた、より詳しく述べしめよ。

錦州で行つた計畫を、此處で繰返すのは、反つて危險であるから贈賄手段を施す積りで遣つて來た、即ち横濱正金銀行天津支店發行五弗紙幣五百弗束を、全驛長に投與して通り抜けやうと考へたのだ。

然るに怪しからん、向ふから先んぜられた、列車が着驛するや否や、余は差止命令を受けた、宛も我列車の着するを待搆へてゐも

居たやうに。

自分は抗議を試みた、清國人の木材なることを辨疏した、送狀を見せた、聞き容れられない。五百弗を贈らうと申込んだ、効目がない、千弗に直上げした、頑として應じない、應じないのも無理はない、此驛で、禁制品たるを發見せられたのなら、或は贈賄で通過するを得るかも知れないが錦州の驛長が後で感附いて電報で言つて寄したのだから、最う此驛長一个で何うすることも出來ないのだ。

余は更に一策を立てた、卽ち『何うせ仕方がないから此貨物は一旦悉く下して了ふ、否下したことに爲し、更に別の新らしい貨物を此驛から積んだ積りにする』

此の申込も驛長から拒まれた、差止め電報の來たのは全地の露探間に知れ渡つて居やうから、うつかりした事は出來ないといふのだ。

二五　必死の覺悟、馬車輸送

――驛れて止まん――馬車五百輛――馬車の強發――

苦しい時の人頼み！自分は泣附くやうに白澤隊長及び白井特務に依頼し、有らん限りの手段を極めて、裏面表面の運動を試みたが無効だ、恁うなつては何事も駄目だ、到底人力の及ぶところではない、此上は『致し方ないから、馬車輸送を行つて、出來る丈け遣る、時日が長く掛つて費用も增加するが、誠に止むを得ん、驛れるところまで行つて見るんだ』と自分は一大決心をした。

さて馬車にしたところで、中々少數やそつとではない。隨分大袈裟だ、何うしても五百輛は要る。數回に分けて運んだところで、少くとも百輛は要る、それに、それ〳〵宰領を要するから人數も可なり入用だ。營口の我が社員總出といふことになつた。

ところで溝幫子の附近一帶を引くるめて百輛の馬車は借證き、物

の五十も六ケ敷いので、東は田庄臺、西は大淺河、北は廣寧等五十乃至百清里の遠きに至るまで、ありとあらゆる車輛を徵發した。此の仕事は實力なき我々の能く爲し得るところではない、言ふまでもなく白澤隊長の後援があつた。中尉は我が爲めに部下を四方に特派し、郡長村長を說き、馬車宿を脅かし、或は露國側に屬せる車輛を占領し、遂に二百輛を調達し得た。

恁くて積込みに着手し、先づ五十輛だけ第一縱列車隊として先發せしめた、露國側の馬賊の襲擊に備へん爲め　白澤中尉に請ふて一小隊の部下を附添へることにした。

恁くの如く着々積込みて今や第二縱列車隊の用意全く成り將に出發するばかりに爲つたところに白澤氏から急使が來た、一大快報だ卽ち『馬車輸送暫く見合はせよ。滿車輸送の見込みあり』といへる簡單ではあるが、余等に取つては、耳よりな知らせである。果して滿車で遣れるものから、そんな嬉しい好都合の事はないと

此時ばかりは實際手の舞足の蹈むのも覺ぼえなかつた程であつた。

二六　露國行銀貨の差押へ

支那銀貨五十萬元――夜半の發見――押收し去る

抑々何ういふ仔細で『馬車見合せ』の通知が來るやうになつたのかと言ふと、面白い事件が出來たのだ。

奉天及び新民屯に於ける露軍で、支那銀貨の必要を感じ、天津及び北京に於いて約五十萬元を輯つめ、之を數回に分ち、滿幇子を經て、輸送せんとした、そして其第一回の凡十萬元が、最も秘密に、夜半滿幇子に着いたのは、二三日前のことであつた。

恁んなこともあらか、と夜半と雖へども、警戒をさ〳〵怠りなき我白井日探及び白澤隊長は、目敏くも此秘密輸送を發見し、直樣部下をして該金を差押へしめ、驛長等の百の抗議、千の辨駁を耳にも入れず、分捕品として白澤中尉の本部へ運んで了つた。

中尉は直ちに委細を營口○○○に打電した、折返へして、其大成効を祝し、請取人を送るから差押金を渡せ、と返電が來た。

二七　鐵路大臣の哀訴、白澤氏の强硬

大臣溝帥子に出張す――大臣の辯疏哀訴――頑として應せず――痛快なる談判破裂？

一方に於いて露國側の當局者は、頗る驚いたが、何分戰時禁制品といふ弱みがあるから、公然異議の申立てをして外交談判に持出す譯には行かない、それで勘なからざる運動費を使つて、時の鐵路大臣古月分に内囑するところあり――余は其胡燔柒氏に非ざるを確めて置く。

そこで古大臣は、名を鐵路視察に藉り、親しく溝帥子に出張し、我が白澤中尉の本部を訪問した、由來官吏に傲慢の風ある清國にあつては、大臣の貴きを以て、名もなき匹夫連の宅を訪れるなどゝいふ事は皆無なのだが、此は又よく〳〵の異數である。

大臣は、辭を卑しうして、差押金の決して露西亞のでは非ざることを全く清商の所有で、萬望返還して貰ひ度きことを縷述した、巧言令色、辨疏盡くさゞるなく、哀訴至らざるあき有樣である。

白澤中尉は頑として應じない。

古大臣は執念くも哀訴を續ける。

中尉は、けんもはろゝと刻ね附ける。『何と被仰つたつて駄目ですぞ、斷然出來ませぬ、殊に既に營口に報告して請取人が來ることになつて居ます、御相談は最う此までです、何卒お引取り下さい。』

と最後の宣告を下した時は、如何にも痛快であつた。

此會見を傍觀したら、定めし偉觀であつたらうと思ふ。一方は、苟くも廟堂に立てる一國の大臣、他の一方は、爲めに水火に入るをも辭せざる數百の健兒を顧使する無冠の帝王だ、前者は低頭平身只すら救ひを求めんとする如く、後者は、勝ち誇れる態度を以て意氣昂然と構へて居る、實に良い對照ではないか。

談判は既に極度まで進んだ、破裂するより外仕方がない。

二八　局面一變、利益交換

差押へ金を返還せん――禁制品の輸送を諾せしめん――約成る

我が白澤君が、殆んど侮辱的かる最後の宣告を下した瞬間、氏の胸に、とある考へが閃いた。斯うである、『大臣が此程頼むのだから、該金額は返還してやらう、其代り、數日前から輸送中止されて困つてゐる實踐社の貨物を營口まで鐵道輸送することを承諾せしめやう。此の十萬元は惜しくはあれど、實踐社の貨物として、一商人の私有ではない、急を要する軍需品であるから、其輸送費として、此差押金を支拂つたと思へば濟む、糧を敵に借るといへるは斯んな事をいふのだらう、營口へ報告した後ではあるが、男だ一身に責任を負ふて、實踐社の貨物の爲めに計らふ。』

斯う考へた白澤氏は、言葉を柔げて、『一歩を讓りませう、若し貴

方の方で……』と語り出し、利益交換問題を提出した。

何うなる事かと憂慮措く能はざりし古大臣は、稍々心を安んじたかの如き句調を以て、『それは甚だ容易い事です、金さへ返還して下されば、暫つて其貨物を營口まで輸送致させます、自分の職權上驛長に命じます』と一議に及ばず承諾した。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

斯ういふ事があつたので、我馬車輸送は中止されたのである。

間もなく此談判の結果が事實に現はれて、我社が夥多の禁制品は再び滊車に積込まれ、遂に營口に達するを得た。

二九　清國鐵道七不思議

第六十號列車――廣軌鐵道――夜行列車なし――正月に滊車がない――四等客車――荷物は無賃――鐵路巡警――開札所がない――釣り錢を出さぬ

明治三十九年八月五日午前七時、例に依り第六十號列車は、頭等及び二等客車各一臺、三等客車五臺を率ひて山海關を發車し、何

事もなく、午后二時溝幇子に着いた、より詳しく言はゞ客車七臺の外に、乘客の手小荷物を入れる貨車が一つある――此貨車の附け處が不思議だ、此の下り列車には、三等客車と二等車との間に附ける。營口より上る時は、汽罐車の直ぐ後方に附けること此二年間違つた例がない。

岐路に入るけれども、日本人には珍らしく思はるゝ点が多いから少しく清國の鐵道に就いて書するところ有らしめよ。

▼第一、軌道が廣い。即ち廣軌鐵道で機關車も車輛も餘程大きく從つて輸送力も多大だ。之を見慣けた眼で、隔時に營口邊りで日本の狹軌鐵道を見ると、如何にも小さい氣がする、冗談みたやうだ。トロッグみたやうに思ふ。

▼夜行列車がない。實に莫迦氣た話で、折角便利なる文明の利器を設けながら、半分しか役に立たないと云つても宜い、營口天津間は東京神戸間よりは餘程短距離であるが、滿二日要ると云ふは

夜汽車がないから上りも下りも、山海關で一泊するからだ。これだから日本の汽車に慣れた自分などは間で無益に一晩泊るのが自烈たくて仕樣がない、恁んな事さへなく直ぐ汽車が行くものなら十五六時間もあれば、樂に行けるものをと思ふのである。（天津北京間即ち東京横濱間といふ如き處丈けは夜行が出來たと覺ゆ）

▼正月には汽車がない。なども七不思議の一たるを免れあい、敢へて殘らずが無いといふ譯ではないが、日に一度位しか出さない貨物列車などと來たら、皆無だ。では貨物が山の如く輻輳しやうと平氣で居るのかと言へば、そこはちやんと善やうになつてゐる。荷主の方で正月の半分は荷物を出さないのだ、一般に支那の風は正月の上半分、少なくも七八日間は商賣を休む慣例になつてゐる。

▼腰掛のない四等客車。三等客車には腰掛がない。皆突立つてゐるが、手荷物の上にでも尻を下すのだ、それで乘手が多い時はいくらでも乘せる、詰まる丈け詰める、澤庵大根でも漬けるやうに

壓込む、身動きが出來ない位ゐは尙しも、窓から頭の上へ飛込まれることがある、宛然、犬群か豚みたやうだ。

けれども、屋根のあるのは、まだ〳〵難有い方だ、時としては無蓋車に追込まされることがある。雨の降らない日と雖へども、夏の盛りや、冬の寒い時には閉口せざるを得ない、日本人なら堪ず死んだり、凍ね死んで了ふだらう、恁んな風で日本の三等よりも一等下であるから、四等車と云ふ方が適切だ、そして清國の二等が、丁度我が三等に當つてゐる。

▼汽車賃が高い。客車が、お粗末でありながら、取るものは、反つて高い、我國と三四割は違ふだらう。

▼荷物は無賃。まさかに汽車賃の高い埋め合はせでもあるまいが、手小荷物は何んなにあつても、一貨車全部を占めない範圍に於いて無料である。即ち一人に對して柳行李の十や二十。ビール箱、酒樽、籠筒、長持、植物はムれ、鷄籠はムれ、魚類の荷宜しいと

云ふ次第である。其の代り、自分の手で苦力を雇ふか何うかして既記の貨物車に積込むので、鐵道掛りでは積込みの勞は取らない又保管の責任を負はない。其代り一人の鐵路巡警が乘込んでゐる。

▼鐵路巡警。汽車の發着とも、各停車場には必ず一小隊位ゐの鐵路巡警と稱する兵士が、附け劍で整列する。これ馬賊の變に備へる爲めである。尙列車中にも一車一人位ゐの割で此巡警が乘込んでゐる。

▼開札所がない。切符を買へば、どし〳〵プラットフォームに出る、其境ひに開札口の設けがない——甚だしきは停車場の構内と構外との區限が設けてない、何處からでも乘降口へ入り込める——發車してから、車中で改札して鋏を入れる、そして仝時に、次の驛にて降車せんとする人々の切符を取り上げるといふ仕組になつてゐる。

▼釣錢を渡さない。數へ去り數へ來れば、七不思議は八にも

九にもなる。此は掛官の弊害だ、清國鐵道貨銀には總て端錢に五錢以外の種類はない、即ち二十錢、二十五錢と云ふのはあるが、五十三錢とか、六十七錢といふのはない、そして此五錢の半端が附いて五錢釣錢を出すべき場合に、決して出さない、客の方でも夫で當り前だと思つてゐる、營口溝幇子間は三等貨金一圓十五錢の規定だが、皆一圓二十錢宛拂ふ。最も僕等の如き無催促して釣錢を取る。

此等は皆出札掛りの役德になる、弊害も甚しいかな。

三〇　馬賊滿車を襲撃す、旅客の捕虜

第六十號列車の大任務――双塔子の鐵橋――列車の停車――乘客を裸にす――窮案捕擒さる

記事は前へと戻る、我が六十號列車は或る重大なる特別任務を帶びて居る。それが爲め、特に警戒を嚴にし、巡警の乘込も平日よりは倍にしてある。

さなきだに今や高粱生育して開花の期に入り、馬賊の時節となつて居る、警衛嚴なるが上にも嚴ならざる可からず。

幸ひに、何事もなく溝幇子まで來つた。此驛に於いても給水の爲め二十分間の停車を終るや、一列の巡警が『荷へ銃』に送られて滯りなく出發した。

旅程は既に四分の三を終へり、前途知るべきのみ、今一時間の後には、田庄台鎭營に送るべく山海關より積込める約五萬兩の銀貨を、首尾宜く引渡し、重大なる任務を果たすことを得べしと待望けられた。

嗚呼此列車をして無難に田庄臺に着さしめば止む。天下至極太平である。何ぞ知らん、驚天動地の活劇が、直ぐ次の瞬間に演せられんとは。

列車は進行を緩めつゝ徐々と双台子の鐵橋に差懸らんとするや、此時遲く此時早く、線路の下なる高粱の茂みから、突然三四の人

影が現れたかと思ふと、咄嗟の間に、ひらりッと汽鑵車に飛乗つた。動作の疾きこと飛鳥の如くである。

忽ちにして、ポン〳〵と二三發の短銃の音、きやつと叫びの聲、驚て列車は停つた。

『馬賊襲來！運轉手が殺られた。』といふ聲が、客車の一隅から起つて、乗客を驚かした。此瞬間、何處より現はれたのか、一群の馬賊が列車を取圍んだ。

旅客の驚愕は非常だ、婦人は泣伏す、小供は叫ぶ。

彼等は巡警の頼むべからざるを知抜いて居るから、力にしない。持合せの金圓物品を悉く賊徒の前へ投げ出して、生命丈けを助からんと覺悟した。

怯懦にして且怜悧なる巡警は、衆寡敵せずと見て取り、抵抗するの愚をなさない、高手傍觀して居る。怎んな巡警が何の役に立つであらうか、怎んな態度を取るのは、間接に賊の味

方するも仝樣だ。春秋的筆法で行くと、『巡警旅客を襲ふ』と特筆大書すべき場合である。

尚隠蔽してはないかと、乗客の懐中から襟衣まで、根こすに検められた、善い着物を着け居た物は着物ごと身ぐるみ剥がれて了つたのもある。

宛然、雲と霞り來る蝗虫が、草木の葉といふ葉を喰ひ盡し、其過ぐる處、野に茱色なしと云ふ惨狀を呈するかのやう。

言ふ迄もなく、田庄臺に送るべき五萬の大金は、賊徒が、第一番に占領して了つたのである。

讀者、此等賊徒が、今日突然に此滊車を襲撃し、折宜く人[illegible]見して掠奪したと思ひなば、未だ賊徒の事情に疎きもの[illegible]ければならない、豫じめ放てる細作の註進により此事を[illegible]つて來たのだ。

彼等は最早一物の奪ふべきなきを見て、引上げるかと云[illegible]

血眼になつて、彼か此かと何物をか探しつゝある。果して何をなさんとする。

それも其筈！海城附近隨一の大富豪が、天津地方の漫遊を終へ歸鄉すべく此列車に乘込めり、といふ報道が賊の手に入つて居るので、それを探してゐるのだ。

聽て賊徒は乘客の一人を捕捉して引上げて行つた。

三　諸候の搆、身受金

宛然城廓をなす——諸候の觀——身受金の交渉——人質放免

海城の北、里餘、土家甫と稱する村の外れに、林と云へる近村限つての大富豪が住んで居る、附邊見渡す限り一帶の田地は彼の領土である、近村有る限りの建家は彼の持物である、其住宅は約四五町四方もあるから七八百段はあらう、回らすに高くして厚き煉瓦塀を以てし、四隅には砲臺を築き、嚴として城廓をなしゐる、

其常備ひに使用する苦力二百餘人に上り、所持せる荷馬車は百餘臺もある。馬匹は無慮三百頭を超ゆ、凡てが我が舊時の諸候の觀あり。

双臺子に於ける鐵道襲擊事變の後五日を經たる日の午前、近鄉に見馴れぬ一騎兵が此邸に乘込んだ。

此騎兵は隊長の命を此家に齎したのである、彼の言を以て察するに、馬賊に捕捉せられたのは此邸の主人林氏である、賊徒は林を將て海城の東三臺子と呼ぶ村に來た、そして其處から使者を寄して身受金の交渉に及んで來たのだ。

『何日何時何萬元、何處まで持て來れば、引換に主人を放免しやう。さもなくば許さぬ』といふのである。

林の留守宅では、歸るべき主人が歸らないので心配し拔いて居た矢先、此意外の報を得て益々驚いた、何せよ、人質を取られて居るのだから、退引ならない、先方の交渉を聽容れなかつたり、討

手でも向けやうものなら、それこそ主人の生命に關つて來る。

戰國時代に於いて各地に割居する群雄が、骨肉を人質に遣たり取たりするのは、皮肉策で、一方では苦肉策だ。恁んな酷い事はあるまい、恁んな人道に反いて居ることはない。人間を玩器にしてゐるのだ。親を人質にして脅を腹に換へた明智光秀や漢の高祖なんと云ふ奴は、以ての外の不埒者である。親殺し親逆待の大罪人である。

今日我が林の場合に於いても、主人を犧牲に供せば卽ち止む、然れども苟くも主人を助けんと欲せば、賊の申込み通り身受金を拂ふより外に手段はないのだ。止むを得ず出金することゝなつて、林は無事に放免さるゝを得た。

三二　支那芝居の生命

芝居小屋——花道がない——時代物多し——大音なる白

これは余が馬糧を輸送すべく東海に赴き、海賊騷ぎで、暫く全地に滯在せる時の事である、丁度舊五月の節句に當るので隣りの菊花山と云へる村へ芝居が掛つた。

正月だとか、五月だとか乃至十月には、至るところ村芝居が催される、無論邊鄙な小さい村には常設小屋がないから、急に材木で掘立小屋を設けるのだ。良い都會になると常設小屋がある。

それで、花道もなければ、書割もない、ちよぼがない。只我が鳴物と地囃しに類似して、笛や、鉦や銅羅を騷がしいほど矢鱈に、がちや〳〵鳴らすのである。

狂言は時代物が多い、英雄豪傑が出たり、山賊が出たりするのが通例だ、是等に扮する俳優は其顏を厭と云ふほど濃厚に赤く塗り立て、頭部には雉子の尾羽根の如き長き羽根を插し、燦然たる衣粧を裝ひ、龍虎の類を畫ける深靴を穿き、青龍刀とも思はるゝ巾廣の大刀を、小側に掻込み、意氣揚々と跳り出る。

立ち回りは中々烈しい、大刀を振り回はし、或は足を蹴上げること、敏捷で活潑だ、對手を追散らしたり、其他何か一段落濟むと、舞臺の正面を向いて、『見に』をする、身體を大きくし眼を張り、眼玉を剝き出す。

多く、恁かる場合に、頗る大きな聲で、長々と、獨唱の白を行る宛然大音で唱歌でも唱ふやうなる調子である。

此大音の長々しき白――聲色――が即ち支那芝居の特色である。俳優は此白に就いて大苦心をする。

支那演劇の生命

此白が惡るければ芝居は成立て居ないと言つても宜いのである。從つて俳優の優劣は此聲色の如何に依りて品隲せられるのである。一般の支那人は、能く此聲色を摸倣して、平常口吟すること、我日本人が鼻歌か都々逸を口吟むが如し。

三三　孝女の犧牲

支那演劇の一例――因強親父――慈悲深き娘――泊り客――意外の殺人――父の悔悟

菊花山で余が觀た狂言は時代物以外のが多かつた。第一は嫁が姑に酷待られて縊死ぬといふ可哀相な筋、二番目は、幼なくして離れたる子が母親を尋ぬるといふ愛しき幕、第三は次の如きものである、日本ならば二三世紀も時代後れになつて誰一人觀客もあるまい。

此處に其梗概を記して支那演劇の一例としやう。

或强慾な宿屋がある、主人の因强なるに打て變つて娘は年こそ尚若いが慈悲深い。或日の夕方、生若い商人風の男が泊つた。親父は此泊り客の懷の温かさうなのを見込み、暗殺を工んだ、然るを及物を磨くところを娘に發見され、泣いて意見された。が此親父何で聽容れやう。

娘は思案を變へ、家人の寢靜まつた頃を窺ひ、旅客の寢間に忍び込んで、彼に父の惡計を打明け、速に逃ぐべきことを勸めた、旅人は、それでは後へ殘る娘が迷惑するだからうから、共に手に手を取つて逃げやうと言ふを、娘は耻かしげに頭を振りて、それは

反つて追跡される便利になつて、娘の厚意も無になると、押合つて居る間に、早くも、親父は血に渇へたる刄を片手に隣室に忍び來つた樣子であるから、娘は、拒む旅人を『早くお逃げなさい』と窓の外へ突き出した。

親父は、恁くとも知らず、夜具の上から刄を突立てれば、旅人と思ひの外、現在我娘を手に掛けたのだ、娘は傷さを怺へ、少しも騒がないで、彼が自ら殺された理由を物語つた。即ち一つには、客を逃した罪を償ふ爲め、二つには、死で親を諫めん爲めであるといふことを。

これを聞いて親父は、男泣きに泣きながら、彼が畢事を爲すも畢竟娘の爲めに財を蓄へん爲であるものを、今しも恁んな破目になつて、彼の望みも絶へた、と翻然悔悟の体を示す。』といふ型式の筋である。

三四　紅鬚子侯爵

貴女旅行中の遭難——山賊——匿名書狀——花房男爵——光子男裝して走る——鳴泉閣の活劇

此は山賊物語である、嘗て著者が朝陽又の名三叉塔といふ蒙古路に行つた時、懇意になつた俳優に向つて『西洋に恁ういふ話がある』と語つて聞かせた。それが、支那の山賊に直したら面白からう』

が直ぐ翌日、演劇に仕組まれた、其梗概は次ぎの如し。

光子といふ英國の貴女がある、芳紀正に二八、春花燃ねんとして月前に芳ばしき風情がある、此旅行を終へ英國に歸りさへすれば戀ひしき許嫁花房男爵と結婚の式が擧げられると、樂し氣に歐洲を漫遊中、或日のこと、圖らずブラルタルの埠頭に立ち、自ら繪筆執つて、海岸の風景の寫生に耽つて居るところを、西班牙の山賊に捕はれて了つた。賊の一行は散々に分れて遠く隔つて居たので獲の遭難には氣が附かないで居た、後で嬢の見ねないのに驚

いて百方捜索したが知れない。ところへ彼等の旅館に向つて、匿名書狀が屆いた、山賊の姓名も何もないから何分解らないが、手際の棧敏な所を以て見ると、當時有名なる紅鬚子侯爵の仕業に違ひないと察せらる。此手紙の使者を介して山賊と數回の秘密交渉をしたが身受金の額で談判が纏らない。

此報一度本國に傳はるや、花房男爵の驚きは非常だ。取るものも取敢へず、直ちに西班牙に急行し其都マドリッドに着くや、光子の仝行者が宿屋を訪ね事情を聞いた。それから花房男爵は山賊の暗示に從つて、會見場へ尋ね行つたが、家を間違へたのか、山賊から何の通知が來ない。で人の噂さを頼りに、山賊の通つたと云へる後を後をと追駈けて行つた。

然るに彼がマドリッドを出立した翌日、松と呼べる山賊の手下が手紙を持つて行つたが男爵の出立した後だから、仕方がない、松は悄然歸へつて行つた、さて其の手紙の大意といふのは、

當時紅鬚子侯爵の客分たる光子が最愛の友花房男爵よ！アルトの山に產する世界無比の甘露を得んと欲せば、今夜三更、山上鳴梟閣に來たれ。武裝すべからず、汝は安全なるべし。

といふのであつたが、行違ひになつたから、男爵と紅鬚子侯とは會見の機を失つた。然るに、不思議なる哉！場處も其儘、鳴梟閣其夜、其の時間に露違はず、山賊と？との會見があつた。會見の場處に指定されし鳴梟閣は、人も通はぬ山中に於ける山賊の密會所で、前に出た松といふのが留守して居る。彼奴今日手紙を先方に渡すことを得なかつた爲め、紅鬚子侯の怒を受けんと悄然てゐる。夕方になつて空が曇り初し風が出て忽ち大雨となつた松は心密かに祈つた、『侯爵は手紙の行違ひを知らず、會見せんと雨を冒して遣つて來るだらうが、此風で谷の底に吹落されて死ばつて了へば、小言を聞かずに濟む』と親分の死を祈りつゝある折も烈しく戸を叩く者がある『蹴破！親分のお出、是非なし』と

詮方なさゝうに、戸を排くれば、恐れて居た親分と思ひの外、息堰き斷つた年若き美男子が風に壓されて轉げ込んだ。

行成り松の腕に凭れて、物をも得言はず息を堰いてゐる樣子が、如何にも疲れて居るらしいから、松は介抱してやらうと、彼の肌に手を觸れると、此は不思議、男と思ひの外、倘うら若い娘では、あいか。吃驚して尋ねて見ると、誰あらう、山上の奥の院に押込まれてゐる光子其人だ、今日しも賊長の不任に乘して番人を欺き逃出した處俄雨に遇ひ命からく此處まで落て來たのだ。

松は又光子に、手紙の行違ひの次第から、親分の今に來るべきことを告げた、光子は折角脱け出で來たものを、恁んな家へ逃げ込んだのは運の盡きだと悲んだ。松は腕を組んで瀕りに何か考へ込んでゐる。

折から紅鬚子侯が遣つて來る馬の足音が聞へるので、遲々しては居られないと、松は立上がつた、彼の腹には成算が成立つたのだ

恁うだ、光子の男裝せるを利用し、花房男爵の積りで親分に會見せしめやう、然らば手紙の間に合はなかつた失策も出ないし、光子も助かるといふ一擧兩得の策である。と此計略を口早に光子に告げた。

恁くて光子は、花房男爵に成濟まし、松から渡された一挺の短銃をポケットに隱して、大膽に賊長と會見した。賊は恁んなことゝは知らない、本當の男爵と思つて、光子身受金の事やら、色々語り出して返答を迫つた、男爵の光子は、自分が僞はれた後の外部の事情を知らないから、兎角辻褄の合はぬ返答をして賊の不審を招かんとする。ポケットの短銃さへ發見され、捲き上げられた、手紙の約束に反けるを詰ちられ、一語は一語より急に、あわや事破れんとするの瞬間、戸外に囂々物音がした思ふと一隊の官兵が鳴梟閧を取圍み、隊中より現はれたる眞の花房男爵が山賊光子會談の場處に飛込んで名告を揚げた。

事を見て取るに敏なる光子は仔細を合點し勇氣頓に加はり、男爵が二人現はれたのを訝かる隙を窺ひ賊の行成り立つて短銃を奪ひ返し、賊の胸に差向けた、其の權幕の烈しかつたこと恐るべしであつた、帽子は刎飛び、マントルが振落つる下から、房々した金髪の女姿が現はれる。

此處で幕だ、紅鬚子は清音『はんふうづ』で盜賊と云ふ語であるが、語路が良いと思つて侯爵の頭に冠らしたのは著者の戯である

三五　海賊に遇ふ

馬糧輸送――大ヂャンク――發砲――日本人を手込みにす――陸は馬賊海には海賊――著者立退きを請求さる――海賊の探偵

錦州附近へ馬糧の買込みに行つたといふ事は既に記せるが、海上營口に輸送する爲め、小凌河の河口東海といへる村へ馬糧を集中した。

一方に於いて營口に於ける我が實踐社は社員田邊をして十艘のヂャンクを率ひて、該馬糧を受取るべく海上東海へ航せしめた。

遼河々口を出で、渤海灣を陸地に沿ふて西へ〳〵と航した。丁度二日目の夕方であつた、彼是大凌河間近だなと思ふ邊りまで來ると、二十噸もあらうといふ大ヂャンクが二艘揃つて勢ひ宜く此方眼懸けて漕いて來た、手頃の距離になるや、一發の空砲を放つたこれ卽ち山東邊りから此邊の海上を荒し回る海賊船である、田邊の船は、船頭が恐れて進行を停めて了つた。

船と船とが密接すると、海賊等は田邊の船へ乘込んで、慄へ戰く船頭共の所持品を殘らず剝き取り、遂には唯一の日本人田邊までも手込みに逢はした、田邊は岡山の者で可成柔術の心得ある男だが、多勢に無勢、なまじ手出しても何の効もない。況して重大なる任務を負へる身の上、徒らに犬死せんよりは、此處は一先づ無事に生延びて、善後策を計るこそ大事であると、血氣の勇を抑へ眼を睡り、涙を呑み、素直に賊徒の爲す儘に任せて置いた。

それでも短銃を隠したと言つて、田邊は可哀相に、頭の毛を引攫まれ、脊中を嫌と云ふほど打擲附けられた。

彼等は日本人と雖へども、屁とも思つてゐない。彼等の眼中内國人外國人の差別はない、誰れでも亡れ弱い者いぢめを遣つて、海上に威張りかへつてゐる。

嗚呼海賊！汝等は海を家とし、海を墓とし、叛圖は茫々際涯なく權力は耿々無限である。世界何者か、能く海賊の叛圖に超ゆる領地を有するあらんや、將又、より強大なる權力を有するものあらんや。

陸にあつては馬賊、海にあつては海賊、

並び稱して田邊は恁んな災難に遇ひ、翌日眞蒼になつて、小凌河を遡つて東海に來つた

陸の二大無冠帝王

とや云はん

余は意外な變事を聞いて驚いたが、一刻も早く營口に報して善後策を運らさなければならないから、直ちに錦州に走り、實踐社に

急電を發した、尚親しく實況を陳せしめん爲め田邊を本社に急行せしめた。

自分は東海に留まつて馬糧を警衛して居た。

其後海賊は漸々近海に進擊し來たり、老河より小凌河河口へ掛けて其姿を現はすに至つた、遂には我が東海と一葦對岸の小鹽窩まで押掛けて來た、小凌河一つ跨げば我東海だから、今日は海賊が來るか、明日は來るかと、村民は生きた心地もしなつた。

附近の海上一面恐慌風が吹荒さんで、沖には一つの船が見ない

只海賊船の帆柱ばかり雲表に聳へ立てるのみ。

形勢益々不穩にあるので、余は遂に宿から謝絶された——それは海賊が此處に營口行の馬糧と日本人の居るのを知つて今に推寄せんとして居る、余の此處に居るのは實に危險だ、加之ず宿でも迷惑すると云ふ口實で。

余は恁んな事に頓着しないで、日々海賊の行動、所在を探り一々

營口に打電する、尙錦州に在る西田特務に出張を煩はし、氏の側よりも報告を發して貰ひ、鶴首して保護船の來るを待つて居た。

三六　海賊討伐

二隻の小蒸滊船――艇隊今朝未明出發す――砲聲殷々――海陸夾擊の計略――知縣――大勝利

營口○○○に於いては、其國人を保護すべき義務ありと思考せるのみならず、馬糧は原軍需品なるを以て是非とも何とか爲なければならぬ責任もあるのであるが、如何せん遼河以西は中立帶であるので、一寸事が面倒だ、餘り表面立ぬやうに遣らうと議決した。それで十五噸ほどの小蒸滊船二隻を撰び、機關砲を礎ゑ、各船と共に支那巡捕四十名○○○十名○長一名宛分乘してゐる、第一回目は途中暴風雨に遇ひ、船體に故障を生せし爲め空しく引返へした。

第二回出發の準備が整ふまでに約十日も要つた。

海賊は依然船を老河に附けてゐる、我東海より其帆柱が見ゆる。

『艇隊、今朝未明出發せり』との電報に接せる余は、今日こそは待ち拂へて居た、果然午後四時と思しき頃、砲聲が聞こへ初めた『遣り初したな！』と、山なす馬糧の上に登り上つて、老河の方を眺めたが、海賊船の帆柱の右左に動くが見ゆる、遂には其燒ける炎が夕靄の中に眞赤になつて見ゆる。

獨り快哉を呼ぶ余に引換へ、東海の村民は新しき心配を生じた。海から追上げられたる海賊が陸を傳ふて此邊へ來はしまいかと心配したが、此心配は程なく二小隊ほどの清兵が錦州から到着したので、消えて了つた。

賊船を海陸から夾み擊つたら妙であると思ひ、余は錦州の西田特務に請ふて、錦州知縣に申込み、當日、清兵を繰出すことを依頼して置いたのである。

知縣といへば、一と云つて二と下らぬ有力なる地方官であるが、

某國が艇隊の派遣に就いて、敢へて『中立違反』呼ばりをする所ではない。反つて支那官憲が行屆かない爲め海賊の跋扈するに至りたるを謝し、出兵を承諾した。

知縣などと云つても內實非常に戰勝國を恐てゐるのだ、うか〳〵とすると○探の嫌疑を受けて非道い目に遇はされるから、○○○の申込みに對して成る可く便義を計るやうに勉めて居る。

砲聲が止むと、間もなく艇隊と余との間に連絡が取れて、大勝利の快報を得た。

三七　海賊全滅、分捕功名帳

機關砲を浴びせ懸く――賊逃出す――退潮――連判帳――兄弟の誓約――血判――功名帳――

此戰鬪の模樣に就いて、再び艇隊に乘込み來れる我が田邊から聞き得たところを、ざつと述べやう。

海上怪しいと思つた船は、片端から取抑へて檢査したが、賊船らしいのは見當らなかつた老河の見當に當りて四五艘見ゐるのが、それに違ひないと、近寄つて銃を一發放つて見たが應じない、逃げも爲ない。愈々近寄ると、出拔けに彼の船から一齊射擊を行つて來た。銃丸が四つ五つほど我が船に命中する。

我からは此處を先途と機關砲を浴びせ懸けた、賊徒は上げ板の蔭に隱れて、溯りに應戰する、機關砲もあつたが、早くも我に先を越されて破壞されて了つた。

一時間半も戰つたと思ふ頃、彼等は大部損害を受けたのであらう陸地目懸けて漕出した、生憎退潮なので、我艇隊は追擊することが出來ない、遠方から機關砲を浴びせ懸けて居るばかりである。

其中に賊のヂャンクは潮の退ける處から死傷者を連んで行く。滿潮を待つて、我艇隊は賊徒の乘り捨てた船に接近して一々調べて見ると、我が砲擊の効果が有り〳〵見ゐる、船が大部破損して血痕も夥しい、最う役に立つ見込みのない小船二隻を燒いて、五

隻を戰利船として分捕つた。一つの船室から**連判帳と分捕功名帳**が現はれた

連判帳には何が書いてあるかと言へば、相互ひに規約を嚴守して兄弟の交りを結び、親子兄弟夫婦の中でも秘密は決して他言かさざること。仲間仝志必ず義理を欠くべからざること等數ケ條書いてある、其最後に加入の順序で署名血判が捺つて居る。

分捕功名帳には分捕品の明細なる仕譯、月日が明細に記入されて居る。田邊一行の遭難に就いても一頁ほど埋められてある。蓋し彼等仲間間に分配する時の參考に供する爲めであらう。

語り去り語り來り、田邊は更に憐むべき話を添へる。

燒いた船の一方は海賊船ではない、元々漁船で父子三人が乘つて居たところ、四五日以前海賊に捕へられ、折角蓄へた二百條元の金子を奪はれたのみならず、船までも徵發され、搗て加へて、父子三人當分其手下となつて船頭を爲ろと脅かされたので止むを得

ず、言はるゝ通りで働いて居ると、今日此戰鬪が始まつたのであるが、賊徒が逃げる際、行掛けの駄賃として、無慘にも親父を一突に刺殺して行つたので、兄弟は父の死骸にすがり附いて泣いて居た。

戰鬪談は此で終つた、海上が掃蕩されたので、我馬福船は無事營口へ航行するを得た。

三八　大仕掛の海賊

蒸氣船を襲ふ——船客となりて乘込む——內部より攪亂——平時は漁夫——暗賊——樂山洋——

時代官軍

此は海賊が西江に於いて氣船を襲擊せる記事で、著者と無關係であるが、海賊の猛烈なる、そして至る處に出沒する例として、日本郵船會社米國通ひ安藝丸事務長の語る所を掲げん

十四日——本年九月——英國氣船タイヌイン號は廣東を發し、梧州に向ひ西江を航行する途中、船客一同晩餐を催さん爲め席に就

ける折しも、下等船客として香港より乗込める十七名の支那人が其顔に墨を塗り、短銃又は刀劍を提げ、跳り出て、船長に迫り、同船に搭載せる十萬両の支那銀貨を奪取し、乗客の金品をも掠め陸岸に近づくを待つて、彼等は出迎への支那船に乗移り逃走せり此騒動によりて上等船客數名殺害され、船長も股を打貫かれ、機關士一名を除く外船員船醫を併せ五名の殺害者と、多數の負傷者を出せり。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

更に廣東方面に於ける海賊に就いて、大阪毎日新聞掲載南清視察記の一節を轉載せん。

由來福建から廣東にかけ此の海賊は今日に始まつたことではなく昔から此地方に澤山ある。恰も滿州に馬賊のあるのと同樣、清國政府の力を以てしては中々これを鎮壓することが出來ぬのである。それでも今日では幾分か減少してゐるに相違ない。臺灣と對岸との交通がヂャンクで行はれた頃といふものは、厦門汕頭の海上は殆んど海賊の巣窟となつて居た、然し近頃は外國軍艦や清國砲艦の偵邏で海上の海賊は餘程少くなつたが、其代り今度は西江を始め廣東附近の川を横行する海賊が增加してヂャンクを襲撃し、其貨物を掠奪することと頻々として毎日のやうに起る、而も此は誰も怪しむものなく外國人も支那人のとだから敢て苦情へ唱へなかつた、然るに近頃に至つては香港廣東間若しくは香港より西江の諸市に至る曳船の小蒸汽船が時々襲撃される、之は皆外國船であるから、茲に外國人の海賊取締説が喧しくなつて來た。殊に本年に入りては汽船すらも賊の爲めに襲撃せらるゝに至つた。

廣東税關の昨年度報告によれば、税關に通知されたる同年度中小蒸溟船の海賊に遭遇せし事件は合計十件で、彼等の爲めに掠奪されたる馬蹄銀は六千兩餘とのこと、又その中の二件は廣東の市街より僅か二三哩を隔てたる所で起つたとのことである。而して僅

に一件のみ首尾よく海賊を撃退したと云ふ、彼等は大抵の場合に少數なる船員では、これを防禦することは非常の困難である。然らば彼等海賊は**乘客として乘込み、内部から爆發して來るのだから**、恰も滿州の馬賊と同樣である、馬賊の多くは一村にあつては良民たり、他村に出ては馬賊である。南清の海賊もそれと同じことで**平時は漁夫たり舟夫たるのが時と場合とにて變じて海賊となるのである、**香港の對岸九龍稅關の報告中に**海賊の正体**に就いて左の如き記事がある。

如何なる奴も商賣にして居るかと云ふ

海賊掠奪の狀況は屢次報告したる如くなるも、更に飜つて殆んど總ての漁船および舢舨（舟舟）が動機的海賊にして、彼等は常に己より弱き舟に會する機を待ち、此に遭へば忽ち變じて海賊となり、遭はざれば卽ち漁夫たり舟夫たることを考慮するに及んでは清國官憲が十分這箇の暴行を鎭壓する能はざるも亦敢て怪しむに足らず、假令武裝せる小汽艇を以てこれが取締を勵行するも如何にしてこれが逮捕をなし得べきや何となれば彼等は平時にあつては平和の漁夫たり、唯機に臨みて海賊を働くものなればなり云々

海賊談は此で終る。尙全南清視察記に廣東地方の匪賊に關する一節がある。

兩廣總督の管下は廣東の如き開明の市もあるが、この市街を一歩離るれば依然**水滸傳的の時代**にあるので、例の**梁山泊**のやうなものが、幾千もある、今の總督岑春煊が兩廣に赴任したのも、廣西の匪徒鎭定が第一の目的であつた、彼は着任久々兵を率ゐて廣西各地の匪徒を討伐し昨年八月漸く歸廣して總督の印綬を帶びたのである、爲に大きな匪亂といふやうなものは鎭定されたが、匪賊の橫行するのは依然たるもので、彼等は伍をなし隊を組みて暴行する、恰も我**蜂須賀小六**的親分は中々澤山あるらし

い、賊の巣窟には**砦を築き旗を飜へし銃器を以て討伐官兵と堂々戰闘をする**のである。

廣東から東北僅一里の處に**白雲山**といふ山があるが、この山は矢張り賊の根據地になつてゐる。この山には觀世音を祀つてあるが、これに赴く信者などは常に掠奪をされ、又寺に强盜の押入るのも毎度のやうである、故に同山祭典のある季節にはこの沿道に兵士を派遣して參詣者の警衛をするといふことだ、昨年起つた强盜事件の最も大なるものは、廣東より十三四哩下流の黄埔といふ往時の居留地に近き金鼎といふ村落に起つたのである、即ち此地の質屋に三百人の群をなして强盜が押入つて馬蹄銀四萬両を拉し去つた。

三九　死刑執行實見記

執行場は墓の中央――黒眸の末裔――美男子――猛惡な面魂――最後の憎々しき演説――第斬らる――斬首の音――怨の眼光――斬り損ひ――上から突く――血が走る――奉天執行場――寢肉飛亂――生ぬるい風――生首の晒し處――女の首

四月上旬であつた、營口警務課門前に死刑執行の掲示が出た。今まで恁ういふ事は度々あつたのだが、自分は未だ實見する機會がなかつたので、今日こそは是非！と既定の刻限を待兼ねて市の西端なる此日の執行場に赴いた。

青竹にて矢來を搆へてし鈴ケ森的昔風の御仕置場、又は二重にも三重にも煉瓦の塀立運らせる當今の我監獄署とは其趣を異にし、今し我が臨める執行場は、垣だに一つなき四方明放しの墓地である――支那に於ける執行場の多くと同じく。

此墓地は、今日まで幾百人といふ咎人を瘞めたのであらう、累々たる土饅頭が此處彼處に處狹きまで盛り上げてある、此の三四尺の高さに築いた小山の如き墳墓が、本式の塚なのであらう。我國でも古代は皆な此の通りであつたのだ。そして石碑又は卒塔婆などといふものはない。

此墓地の中央、少しく明地のある處を撰びて、堀られたる縦横二

尺に三尺、深さ三四尺ほどの二個の穴が――尚掘て間がないので あらう、側に盛り上げられた土が乾かないでゐる――今日の犠牲を呑み込まんと待構へてゐる。

聽て數人の憲兵及び巡捕に護衛されつゝ二人の咎人が遣つて來た其後から見物の群集がぞろ〳〵、隨いて來る。二人が『居所に向ふ羊』なら、此群集や護衛は恐らく『送り狼』であらう。

二人は兄弟で、馬賊の末裔だ、大膽に營口市内に入込んで持兇器強盜を働いたところを我憲兵の捕ふるところとなつたのである。弟は二十四五で、色白の頬肉の豐な眼元の愛苦しい美男子だ、恁んな優しさうな男が、強盜を爲やうとは思へない、人は見掛に依らぬものだ。

兄は三十を二つ三つ越してゐる、顏色が黑くて、眼付が凄く、莫迦に體の大きい、力のありさうな此奴なら遣り兼ねさうもないと思はるゝ一体が獰惡に見ゆる面魂である。

二人とも穴の正面に据ゑられて首の坐に直つた。

弟はぶる〳〵、戰へて、生きた心地も爲て居さうもない。

兄はびくともも爲ない、平氣に澄ましたものだ、何か見出さんと欲するごとく群集を見回した後で、呵々と一笑し、聽て聲高だかに一場の演說を始めた『爲度い放題を爲つくして、太く短く此世を送るのは自分の欲するところである、何うせ人間は一度は死なないといふ譯に行かないのだ、然るを一生の晴の場ともいふべき死際を、誰も見ぬ部屋に籠つて壁の上で往生するのは如何にも詰まらない、恁うして日本人始め公衆の眼の前で、花々しく最後を遂げるのは、此上なく嬉しい。名譽の至りだ』などゝ憎々しげの聲を張り上げて居るを、憲兵に足蹴にされて中止した。

執行は弟の方より着手さる、手を後に、高手小手に縛られてゐるのであるが、兩眼を白布で蔽はれ、命せらるゝまゝに、腰を中腰にし、体を少しく前方に屈め、首を延ばした、此刹那、電光石火

的ひを定けて眞額に振翳したる憲兵の太刀がひらりと閃めいて、斬下されたと見る間に、早くも及が首筋に觸れ、ばつと血煙が立つたと思ふ間もなく、ばさりと音がして首は全く斬離され、前方の穴へ落込んだ、全時に體が少しむつくり持上つて、斬口の動脈から濃厚なる眞赤な血潮が氣味惡くすつゝと迸しる、執行者は猶豫なく其躰軀を穴中にのめり落した。

總て此は極短い瞬間の出來事で、見物の群集は息を繼ぐ間もなかつたが、皆悚然として顏色が變つた、中でも氣の弱い者は怯へ兼て倒れさうになる。

執刀者といへ、萬更芋や午蒡を斬るやうな氣は爲まいと思ふ。屹度夢見が惡いだらうよ。恁ういふことを一度でもすると氣が荒くあつて殺伐になるといふことだ。

それが濟むと執刀者は白布で血糊を拭ふ。

因みに云ふ、手で振つて、濡れ手拭の水を斷る音が、首を斬るそれに似てゐるといふが、全く其通りである。それから又清國の斬首は巾の三寸もある青龍刀ともいふべきもので遣つ附けるのである。

始めから終りまで此光景を眺めて居た兄は、全じ運命が次の瞬間に其身の上を見舞ふべしなどゝは少しも知らざるかの如く神色自若として、益々惡落付きに落付いて、面部を蔽ふのを拒んだ、何だる大膽な奴だらう。

執刀者の刀が振り上げられると、流石に輝いたる斷末場の怨みの眼光！群集は悚然として脊中から水を浴びせ掛けられたやう。彼には此が此世の最後の見納めである、大刀が斬り下された時分には瞑目して居た。

然るに彼等は何たる**罰當**りであるのだらう罪業が首筋に凝固まり着いて居たのだらう、手利きの聞に高き今日の執刀者の腕を以てして、尙能く一刀の下、彼を兩斷することが出來なかつた**斬**

り損なつた。氣管の邊りで刄が支へて了つた爲め、頭顱は、だらり俯垂れた。

『これではならぬ』と後から體軀を穴に突落して、上から劔で突きたてる。一度ならず二度ならず、突いて突いて突きたてる、其度毎に、ぱつ〳〵血潮が走る。

此の恐ろしさ、酷たらしさ、身の毛が悚つ、到底見て居られない此光景今も尙歴然目先にちらつくやうな氣がする。

漸く息の根が止まるのを待て穴掘苦力が來て穴に土を被せる。

本書の口繪は卽ち執刀憲兵が劔を斬り下げんとする瞬間を示したのである。

× × × × × × × × × ×

酸鼻なる死刑執行場（首の捨て場）

前章は死刑執行の實景であるが、此處に大阪毎日新聞所載、石堂生氏が報道に係る『奉天死刑執行場を見る』の一部を轉載して酸鼻なる光景の一班を紹介せん

本年に入つてから奉天に於いて死刑卽ち斬首の刑に處せられたものが六十人以上ある、刑場附近にはいつも血生臭き風があたりを立籠めて居る有樣だ……何は兎もあれ死刑場の有樣を見て置かんと七月十七日午前蒸すが如き炎暑を冒して大西門外の死刑場へと向つた。

大西門を出て右折すると一大廣場がある、是れが卽ち死刑執行場で……罪人の死體は一大坑内に投げ込んで置くのが普通であるが死體引受人があつた場合には之を下げ渡す、人の知る如く支那人は不潔といふことを知らない國民である。城外住居の支那人の家屋には糞便場を設けてある所は殆んど一軒もない、人家なき空地は凡て彼等の糞便場である、死刑場の周圍には、人糞乃至豚の糞が所狹きまで大地に參點して、これが天日に乾き上つて薄く馬蹄形

をなしてゐる。その間をぬき足さし足通りすぎると、場の中央に一小堂が建てられてあつて、少しく離れて土地を一丈ばかりの高さに囲く盛り上げ、頂上に瓦の屋根を作つて鐵板の蓋をしてある處がある、之が卽ち犯人の死体を投げ込む穴だ。

死刑場に足を入れると同時に、ぷんと一脉の惡臭が鼻を撲つた、マア何といふ臭だらう、何だか青臭い樣な、甘つたるい樣な形容の出來ない惡臭である、死骸投入坑に近づくに從つて、その臭氣がだん〳〵濃くなつて愈々坑の入口に達した時に、鐵板の隙間から蒸し上る**腐肉の臭氣**が一脉又一脉、人の體を推し付けるやうに迫つて來る、何人も一度此惡臭を嗅いだものは嘔吐を催さずには居られまい、かッとばかりせき來る嘔氣をハンケチでしつかり抑へ、一生の勇氣を鼓して何だか大敵に襲はるゝやうな心持で恐る〳〵鐵板に手を掛けて一尺ばかり持上げた途端に、**生ぬる**い風がフワリ。臭を堪へてじつと坑の中を見渡すと、黑闇々た

る中、入口を通して映し入る光線に照らされて**無數の死骸**、而も**首なき死骸**、無論ハッキリと判らない。それが殆んど坑一杯に盛り上つて**一番上の死骸には蟻のやうなもの**がびつしりたつて居るのが見ゐる、神經のせいか知らないが坑の中から**雲のやうな一團の魔氣が立のぼつて來る**やうに感ぜられたので。いきなり鐵板を放すや否や、駈け下りてホッと一息、何だか氣が遠くなつたやうだ、中央にある、小堂は重罪人の**生首を晒す處**である、周圍には煉瓦を五尺ほどの高さに積上げ外部からは見ない樣になつてある、是れも序に見て置かうと煉瓦の垣の上に攀上り中を見渡すと、是は又更に驚かざるを得ない、堂の中は土間になつて居て煉瓦の破片と交はつて數十の**生首**いや生首ではない、其二三を除くの外は凡て既に髑髏と化してゐる、臭氣を尋ねて集り來れる青蠅幾百幾千の生首の脂氣を嘗め盡くした奴が遠慮なく、人の顏を襲ふのだから堪ならい

首の多くは**肉落ち骨白く**唯**頭髪のみ黑く残つて居る**ので、その凄さと言つたら話にならない。中に確かに**女の首**と見ゆるもの一つ、是れは斬られて尚間もあるまい、下になつてゐる頬のところに多少の腐肉が残つて薄黄色をなし居るが、さらく、とした漆黑の髪、麻のやうに亂れて遺恨綿々として盡きざる形、是れが少くとも數週間前には一個の人間として動き、語りつゝあつたに相違ないのだ、事によつたら非常の美人で、其一顰一笑が幾多男子を惱殺したのかも知れない、それが今は何たる姿かと思ふと、急に變な氣になつて熟視するに堪へなくなつた……中略……尚死刑執行後**屍体は半日位野晒し**にして置くので滿洲特産の猛犬と烏とが、得たり賢しで死骸を貪り食ふ。（下略）

四〇　世襲的馬賊

虚朗の祖先――官人討伐――人間は盜ふ趣味は異なる――別働隊――敵の後方側面に出づ

南滿洲に於いて最も先きに馬賊横行の報が傳へられたのは鐵嶺であつた、それも其筈同所附邊には主領を盧朗と呼んで部下五百人を有する馬賊の一大團隊が根城を搆へてゐる。

○軍の鐵嶺を占領するや、○○○藤野大佐(?)は密に盧朗を呼び、大義明分を說き、利害得失の存する所を諭し、意を翻へして我が味方となり別働隊として働かしむるに至つた。

盧朗は**生れながらの馬賊**である

といふのは彼が家代々馬賊を業とし、相傳へて朗に至つたのである、彼の祖先は此附邊の豪族で、輿望を負ふて居たが、百姓等が塗炭の苦しみを救はんと暴虐なる地方官に反抗して奮ひ起つた。

滿洲は當時尚未開なる隊で、清國の中央からは度外視されて居た、宛も我古代の蝦夷地に於ける如しであつた、從つて人民は質朴一ぺんの鐵骨であつた、處へ中央政府より派遣せられたる地方官は――山東地方の出身が多い――政府の遠くして其罪跡の容易

に顯れざるに乘じ、及び愚民が官人に盲從するを幸ひとし、叨りに苛稅を課し、瀕りに御用金を申付け、不義の富を積めるのみならず、土民の子女の美なるを漁るなど、暴政至らざるはない。

人種は違ふ、趣味は異なる、亂暴はされるといふ箇條が重なり重なつて、流石愚直なる土民も遂に怨嗟、憎惡、聲を洩らすに至つた。

盧の祖先は、是に於いて、家產を擲ちて軍費に當て、此等無辜の民を率いて**官人討伐の義旗を翻へした**。それからといふもの征討に向へる官兵に備へん爲め、又は他村より押寄せる賊徒に當らん爲め、盧は永く主領の位置に居つたのが抑々の起因で、不知不識の間に子に傳へ孫に傳はつた、然るに代が變り、世が移るに從つて普通の盜賊と變らなくなつて了つた。

其上盧が祖先と仝じ徹を蹈んで今日に至つたものが尠くはない、是等が馬賊と名づけられたのは、常に專ら馬で乘回すからである。

が、確か日清戰爭の時からだと記憶する。

盧朗は、我が藤野の大佐の別働隊となつて、支那人なるを利用し、譯もなく露軍の陣地に近づき、或は其側面、乃至背面に出でゝ其兵數、行動、謀略を探つて悉一大佐に報道する。

或は部下を督して彼が小行李を襲ひ、兵站線を脅し、其車輛を奪ひ、其苦力を追散らし、道路橋梁を破壞し、馬糧を燃燒し、あらゆる妨害を試みて、露軍を混亂せしめ、其發展に惡影響を及すことを務めた。

更に又、我軍が物資の徴發に際しては、彼の部下は必要物である彼等が同行せざる限り、物資が集まらない。土人が隱蔽して了ふのだ。

盧は恁くして藤野大佐の手より尠なからざる機密費を給せられるのであるが、此以外、日本の威光を笠に着て、露探の嫌疑ある富豪をいたぶつて多額の金子をせしめることもあるらしかつた。

四一　銃器秘密輸入

帆前船に積び――大連を避く――ヂャンクに積み換ゆ――衝突

藤野の大佐は、休戰後、後備にある身の直ちに現職を退き、再び鐵嶺に來つて、盧朗と結び其部下を股肱とし**回天的一大事業を持上げん計畫があつた**――その何たるかは今暫く秘密を守る義務がある――が、それと何等の關係もなく、此處に沖田と云へる商人の手で、盧朗に給すべく銃器を密輸入すべく計畫された。

沖は此が爲め一旦内地に歸り東京大阪邊を駈回りて、二百餘挺の銃を買ひ集めた、汽船は發見せらるゝの危險があるので、特に帆前般に積込み、軍政の取締り嚴なる大連を避け、船を營口に回した。

此處でも又、流車に載せることなどは固より出來ないのだから、

ヂャンクの底深く積んで遼河を溯り鐵嶺まで輸送する手筈にした税關の眼も旨く暗ましてせて、船は一意上流へ進むのである。

折惡しく退潮になつて來て船頭等の骨折り一通りでない、漸く牛家屯に來た、此處は河流の方向が變はるところで、常から浪の荒い難處である、折しも急に吹初した東北の風が正面に舟にぶつかる、逆流に逆風といふ羽目になつて、舵が利かなくなつた、舟が出なくなつた、流され初した、恁うなつては、船頭等が如何ほど必死に働らいて力んだつて、舟の流れるのを盛り返す譯には行かない、船は急流の爲めに勢ひを得て、奔馬の如く下流へ〳〵と急轉直下する、丁度營口公園沖まで流されて來ると、非常の勢ひで南岸に淀泊せる滊船公平號の艙に衝當つた。

一方は名にし負ふ二千噸といふ最も堅固なる大滊船だ、片方は脆弱き一小ヂャンクに過ぎない。これが矢の如く飛んで來てたる脆弱き一小ヂャンクに過ぎない。これが矢の如く飛んで來て打つかつたのだから、何條堪るべき、あつと云ふ間に、破壞する

ばらく、になる、といふ目も當られない有樣だ。

恁くして沖田が折角此處まで持つて來た二百餘挺の銃はヂャンクと共に滾々たる遼河の濁水に呑込まれて河底深く葬られ、此密輸入事件は敢へなき終りを告げた。

四二　遼河結氷の偉觀

驚くべき急流――千波萬波先きを爭ふ――氷流――氷塊相重疊す――玉顔玲瓏――壯美

銃器密輸入船は遼河の退潮の潮流の爲めに遭難したのであるが此退潮に際せる時の潮流は實に驚くべく急激である。其滿潮に際しては濁水漫々と充ち滿ちて、さなきだに廣大なる遼河は、更に其廣さを增し、對岸の更に遠くなれるを感せしめる、其測り知るべからざる深さは、いとゞ深さを加へて底ひ知られぬ感を起さしむる、其表面は波靜かにして白鷗などが、魚を漁るべく波を蹴つて居る、此平和なる光景も暫時の間だ。一二時間の後いざ退潮となると一變する。

濁流浪を打つて、どし〳〵押流される。後の浪は前のを掻分けて先へ出でんと焦り、前なるは『さうはさせぬ、自分が先へ行かう』と更に前なる浪を力一杯押して、千波萬波敗けじ劣らじと競爭するのやう。さながら千丈の堤が決れて、溢るゝ河水が一時に押寄せるかのやう。

恁くの如き急流であるから結氷とゐつても表面が平面でない、氷の小山が彼方此方に起伏してゐる。

營口邊りは十二月下旬若しくは一月初旬に結氷するが、上流は十一月下旬から氷り初める、早く氷つた處が上潮の激浪で破れる、退潮の流に連れて一部が流れる、此の破片が、下流へ下つて所謂**氷流**となる、大小幾多の氷塊が斷續して流れる樣の如何に美なるよ。時としては河一杯になつて流れることもある、此等が流れて居る間に其表面に**雪が降り積もり**、激浪の爲めに氷塊が他の

氷塊の上に打上げられ氷塊と氷塊とが重り合つて癒合する、果には山の如く高大になる。

恁かる奇觀を呈して流れつゝある間に、氷點以下十何度といふ朔風が吹渡ると此等の氷塊が河水諸共氷つて了ふのだ。

これだから遼河の結氷は盈や池の水が氷つたやうに表面が鏡のやうではない、玉顏玲瓏とは言ひ難い瘤があつたり皺がある。

結氷は河の表面に止まらない、岸の上にまで及ぶ。といふのは、滿潮の際や、大風で兩岸に打上げられた氷塊が其儘殘つて累々としてゐる、此が河面の光景に數段の美觀を添へる。

若しそれ橇に乘つて此の白皚々たる氷の河、氷の野の中央に立ちさなきだにぎらぎらとする氷上を、更にぎらぎらさせて斜めに射るなる夕陽が、果なく氷れる氷海の彼方に沒せんとする光景を眺むれば、凜烈なる寒氣が肌身に泌みて、云ふべからざる悲壯美を感ずるのである。

今夏滿洲に渡りて「夏の滿洲」を瞥見せる我が幾多の青年諸子、何ぞ冬期休業を利用し「冬の滿洲」殊に遼河結氷の偉觀を見んと欲せざる。

四三　遼河解氷の凄壯

解けるのではない——陸が流れる——猛獸の噛み合ひ——解氷後を飾る

解氷時の光景は、結氷間際の有樣を見て略々推察することが出來る。今までも人馬の渡つて居た氷が、急に解けて、以前の水海となる。否解けるのではない時候が温かくなつたので、水に觸るゝ裏面が解けて、氷の厚みが薄くなつてゐるから、機會さへあれば龜裂が出來、其處から破れて幾多の片々となつて流れる。

此の斷片の大きいものは、一個で河巾一杯のがある、恁んなのは氷の斷片とは思へない、陸が流れるやうだ。犬などが知らずに乘て居て海に流されて行くことがある。

大、小幾千の氷塊が退潮の際、例の急流で押流される勢は非常だ。其路に當るものは山の如き甲鐵艦であらうが粉粹せずには置かないといふ見脈である、速力滿ちて、勢ひ頂上に達せる彼等が、中流で押合ひへしあふ樣、猛獸の嚙み合ふにも似たり、或は又河緣を流れて急激に兩岸を摩擦つて行くさま、絶大なる流罐車が流罐も破裂せよとばかりに蒸氣を籠めて、飛ぶが如く鐵軌の上を駈けるにも似たり、めり〳〵、といふ音、がう〳〵、いふ響、幾百幾千相合して轟々と轟く。

其光景、其物音、まことに凄壯の極みである。

上流が全く解けて、氷流が無くなるに至るまでは約半ケ月を經る恁うなるを、河口に淀泊して、待きつたる數十の流船が、一時に碇を揚げて舳艫相接し喞はしく勇ましく入港して解氷後の遼河を飾るのである、仝時に兩岸から萬餘のヂャンクが下されて、假眠期より覺めたる遼河の活動が始まる。

四四　破天荒なる最急先鋒

猛進又猛進——御法度破り——遼ゥの昔露頃に滑り込む——露人と結托す

滿洲の南北及び露境に最も素早く突進する發展の急先鋒とは何を指す？。何處へでも瓢然〳〵押掛ける娘子軍なるか。將又、處嫌はず遠慮なう往診する賣藥先生なるか。あらず。此等皆凡中の凡たるもの、陳腐に黴の生へたるもののみ。

然らば、破天荒の最急先鋒とは何ぞや。

韓國と云はず、滿洲の南北を問はず、遼西でムれ、露境でムれ、苟くも道の通ずる處、人の住める處は、猛進又猛進、官憲と爭ひ土人と鬪ひ、厭く迄も我意を貫き、無理を通さずんは止まざる勢ひを以て白晝大道の眞中に、天下の御法度たる賭場を築き、青天井の下賽子を振つて公衆を對手に一六勝負を爭ひ、社會の公道を無視して顧みざるの痛快事を演ず

るもの、我これを我が賭博師の圏隊に見る。これをしも破天荒と云はずんば、將何とか云はん。

一組の賽子を唯一の財産としてポケットに投入し、日本人の尙入り込まざる處、行かない處、新規な處を的つて行くのであるから何分味方は少ない、勿論領事の下附する旅行券又は護照など一つも持たないのであるから支那官衙の保護を受けることが出來ないけれども、そんな事には少しも頓着なく、鍛ひ練りたる腕一本を頼み、少數なる圏隊を結びて、深く〳〵何處までも進入する彼等が大膽如何ぞや。

四平街條約の結果、日本人は中々北滿洲に入込み得られなかつたが、是より先此圏隊は、早くも潛り込んだ、休戰になるや、ならずや早く侵入したのである、長春、哈爾賓、吉林は、遠くの昔、彼等の蹂躙せるところである。言ふ勿れ、當時吉林哈爾賓に日本人の隻影なしと。恁くいふものは近眼的の皮相觀のみ。

此に至つて自然、「それが何して露國官憲の忌諱に觸れない、追拂はれないか」といふ問が起る。さ、面白いのは此處なんだ。彼等は如才なく旨く立ち回る。

一体清國に入つて賭博を業とせるもの獨り日本人ばかりではない歐米各國人が入込んでゐる――その中で日本人が一番猛進的氣象に富めるは言ふ迄もない――そして北滿洲に於ては幾多の露人が盛んに賭場を開いて居る、我が侵入軍は何より先きに此等の露人を手に入れて生擒つて了ふ。そして共に結托する、露人は自國官憲に手蔓があつて默許されてゐるのだから、日本人が此等のものと共圏するのは最も策の得たるものである。

恁くして、西は北京附近、蒙古路より、北は露境に至るまで、町といふ町、三四百以上民家ある處、芝居の掛かる處、市の立つ處廟のある處、一として賭博遠征隊の踏み込まない處はない。

四五　天下第一の賭博國

賭博的饒倖心――正月は賭博月――全社會が然り――死を賭する大賭博

これといふも支那人の賭博的饒倖心に富めるに乘じたのである。實に支那人は此精神に富めること甚だしい、恐らく天下隨一であらう。身分が善ければ善いほど賭博に耽る、鴉片を喫まぬ者は多いが賭博を爲ないといふものは少ない、賭博禁止の法令は徒らに空文に過ぎない、特に毎年正月の初旬といふものは治外法權で、賭博御免だ、天下晴れて行ることが出來る、正月は、賭博と、酒と、芝居見物で過す慣習である。

更に見よ、栗、梨、南京豆、茹玉子、西瓜種等を賣り歩く行商は悉く籤子を携帶しつゝ博賭的商ひを爲てゐる。

天津の佛蘭西租界などには巡査が立番して賭博場が設けてある。宛も我玉突場かなぞのやうに大箋のものだ。

我賭博師連が店を開くや、忽ち群集が雲霞と寄たかる。十四五の少年が來る。五六十の老爺が來る。兵士がある。巡捕がある。官吏がある。商人がある。乞食がある。苦力がある。百姓がある。

といふ風で、あらゆる社會の階級が集ひ來つて贏輸を爭はないものはない。

吝嗇なるものも、貪慾あるものも、賭博には金子を惜しまない。少しも惜しまない。勝負に負くれば負けるほど、熱くなる。登圖負くれば、貳圓を賭けるといふ調子で、負けるに從つて倍額に張る此が故に、我賭博師先生、朝に空拳を以て出で、夕に百金を得て歸るなどは往々ある、恁ういふ濡手で粟を攫むやうなぼろい事があるので、止められない。死を決して何處までも侵入するのである。

或ひは曰く、此等死を賭する賭博師連が、單に錢を賭する支那人よりも大なる賭を爲て居るのであらう。

我が突進隊の營業は、獨り袋子を振るのみにあらず、インチキ賭あり、玉轉がしあり、文圃しあり、其他苟くも支那人の僥倖心を挑發するに足るものは一として網羅せざるはない。

四六劍の力

博徒遼西に乘込む――先登第一――兵士の故除――白刃を提げて官衙に暴れ込む――賭博公許稅を納む――大々的廣告――利益二千元

頃は日露媾和談判が、ポーツモウスに於いて進行中である。媾和の噂さで不景氣風が吹荒み、營口に於ける一般の商業は不振となつた、其影響が忽ち賭博社會に及ぼし、一時全盛を極めたる賭博も全然彈まなくなつた。

由來賭博と商業とは密接の關係がある。世間の景氣の良い時は賭博が盛んに彈む、惡い時分は淋しい、言ひ換ゆれば、賭博が盛るときは世が良いので、寂れるときは世が惡いのだ。

『怎んな事では營口に居ても面白くない』といふので、山岡藤代

などゝいふ博徒連の中でも、命知らずといふ字名を取つた十數名の猪武者が遼西に飛び出した。

溝帮子をさんざ暴し扱いた揚げ句、廣寧へ進擊した、此處は山間の都會で城廓に爲つて居る盛んな場處だ。然し溝帮子から五六十清里も踏み込むところだから、今まで日本人の入り込んだ者はなかつた、山岡一行が抑々先登第一だ――これも新規の土地に一番槍の功名を揚げるものは彼等であるといふ一例である。

義陛店へと云へる城外の宿屋に掛り、其處を根城として、市内目抜きの處を撰んで店を出す。否、賭場を築く。

開業の日は何事もなかつた、第二日も無事だ、さあ三日目の朝、商賣に(?)出掛けやうといふ矢先へ、土地の衙門から『賭博を禁止する』といふ一片の達が來た。

『なに構ふもんか、どし〳〵遣れ！』『まあ一度は大人しく出やう』といふ硬軟の二說があつたが、此の一回丈けは軟派の意見に從ふ

ことに決まつて、藤代が衙門に掛合ひに行つた。

即ち『御達の趣畏つた。早速退去すべきの所、遠路を來たので旅費が掛つてゐるし、又歸るにも物入かする、宿錢も入る、であるから雜用を得る間、尙三日間打たせて呉れろ』と申し込んだ。

讀者よ『そんな勝手の事を云つて行つて、先方が承知するか？』などと問ひ玉ふな、先方で諾かうが、諾くまいが搏はない、只此方の言草だけ喋つて歸つて來るのだ。

で、其儘べつたり四日になり、五日になり、六日になつても平氣で開店してゐる、丁度七日目のこと、市の中央關帝廟で藤代が平常通り行つてゐるところへ、二三の兵士が來て、物をも言はず、周圍に寄たかつてゐる見物を追拂ひ、且つ其中の一人を賭博犯として、拘引しやうと掛つた、此を見るや藤代は『小癪なまねをするな、拘引するなら俺をしろ、商賣の邪魔をするな』といふより早く、兵士の横面を三つ四つ喰はして、拘引せられんとした支那

人を取返した。

かゝる處へ其附近に店を出せる博徒連が援兵に來て、到頭此兵士を袋叩きにし半死半生の目に遭はしたのみならず、事あるを喜べる山岡は大刀片手に衙門に暴れ込んだ。

命知らずの猪武者が怒りの相額恐ろしく白刃を揮つて飛込んだのだから官長も手が出せない、慌いてゐるばかりだ、山岡隊長は拔身片手に、衙立つたまゝ『日本人が開設せる賭場に苦情を持ち込まざること、其代り博徒方より相當の冥加金を毎日納れること』といふ條件を申出して官長に承諾を强ゐた。

恁くの如くして**劍の力**で此條件も聽かれ、そして**賭博公許稅**を納むることになつた。

恁うなれば最う此方のものだ、翌日は此方の手で**賭博公許の大々的廣告を觸れ歩いた**。賭場の數を增して最も盛大に行るに至つた。

此盛況を續くる三週間ばかり、一行皆尠なからざる利益を擧げ、二千圓以下の金子を持つてゐるものはない程であるから『營口へ歸へて豪遊が出來る、大散財を遣て料理店の相場を狂はせて遣らう』と特有の美的生活を遐想する者もあれば『久しぶりで故郷へ金子を送ることが出來る』と樂しめる殊勝な者もある。

四七　修羅の巷、賽は魔物

連勝の百姓――一六勝負の仕方説明――賽は魔物――局面一變――若物を賭ける――喧嘩の對手は馬賊――足の甲にぐさり――腹背敵を受く――旅宿を襲ふ――泣寝入り――

懷中が溫かになると歸り風が立つ『今日一日だけ打つて明日はいよ〳〵御立ちにしやう』といふ其日が、午前は無事であつた。午後二時頃『千秋樂だ早く終う』と、將に片附けんとする山岡の店先へ、服裝見すぼらしき百姓体の中老年が突然遣つて來て、ぽかり壹元張つた。

彼は勝てり、更に貳元張つた、再び勝てり。

勝に乘じて百姓は、又更に三圓を張つた、これ彼は前二回に勝ち得たる全額である。

勝利は又も彼の手に歸せり。機逸すべからずと彼は更に、勝ち得たる全領――六圓――を張つた。

說き去り說き來たり、是に至つて『張る』といふのは何することだ、勝負は何して決ける、といふことを說明して

一六勝負の遣り方

を書き立てる必要がある。此が解らなければ、今正に逃べつゝある山岡對百姓の戰爭の妙味は解すべからず、然れども、恐かる事を詳細に說明するは**治安を妨害するの恐れある**を以て、遺憾であるが、止むを得ず之を略す。讀者！『張る』は讀んで字の如く單に『張る』であらしめよ。『勝つ』又然り。

所謂『目の出て居る』百姓は連勝の勢ひを以て、又もや勝つた。

恁うなれば胴親――山岡――は『落ち目』だ。いくら遣つても、

『勝ち目』は立ゝない。此上負け込まぬ内に限上げやうとしたが

勝ち誇りたる百姓は聴容れない。

『ね！糞ッ！最う一番遣れ、度胸だ』と山岡は續いて遣るべく決心した。

對手は胴親を『張り潰さんず』勢ひを以て、其懐中から、數は知れず、一掴の銀貨を掴み出した、山岡は少し焼けて焦つて居るから、勝負を此一擧に決せんと、『免倒だ、さッ、もつと張れ』と喝破した。

對手もさゝ者、更に一掴を掴み出した。

さあ勝負！と賽子は投ぜられた。

賽子は魔物だ。一念籠めて山岡が振つた賽子の目はころッと變つて出た。

さあ山岡の勝利だ、實に山岡は敗運を一擧に

挽回して除りある。

『恁んな筈がない』と對手は向つて來たが、今度は落ち目だ、遣れば遣るほど、焦れば焦るほど駄目だ。所謂『長と張れば半と出る、半と張れば長』といふ工合で、彼は到頭洗ひざらひ取られて了つた。どうするかと見てゐると、忽ち着物を脱いで、それを張つた。

『ふざけた事をするな、可、搏はぬ、遣れ！』と山岡は賽子を振つた。言ふまでもなく、山岡の物だ。

然るに支那人は『これは冗談だ、着物は渡られない』と取り返へさうと掛る。山岡は『一旦賽子を振つた以上は、さうはならぬ。若し貴様が勝てば何する？』と云ひながら着物を引たくつた。此手合の特性として『手が早い』から、次の瞬間には、百姓の横面をぽかぽか、三つ四つ。

廢せば可かつた、究竟懐中に入るときは獵者も追はずとかや、充

分勝扱いた山岡は、着物の一枚ぐらゐ目に掛けずとも可なりだ。況んや擲るに於いてをや。

百姓と仝じ服裝をなせる連中が十四五人、群集中に混入して、最初から勝負を見て居たが、此樣子を見るや、手早く、各々巨大なる天品棒を執つて山岡目懸けて、打ち掛つた。

此一組は何者なるかと云ふと、近村に住む馬賊の部下なんだ。そして今日は博徒連に喧嘩を賣るべく準備して出て來たのである。夫と知らずに山岡が喧嘩を買ひ込んで、彼等の術中に陷つた。

多勢に無勢、恁かる時には妙策ありと、事に馴れたる山岡は、先づ、手取り早く仕込杖の鞘を拂ひ、力を極めて、寄せ來る敵の最中を目懸け投げ付けた。然るに彼等の一人は、巧みに天品棒で受けて彈ね返した。それが勢鋭く飛んで來て、山岡の足の甲を靴の上から貫いた。

『やられた！』と叫んで、山岡は死にもの狂ひに其刄を引き抜き、

近寄る敵の横腹へ衝込んだ處を、後から天品棒で、破るほど頭を擲られたので、彼は目が眩み倒れる。其上から天品棒の雨が降る。

恁くと聞いた日本人は、山岡を救ふべく一同飛んで來た。先方には彌次馬が附く、兵士までが手傳をする。大騷ぎになつた、此處を先途と博徒連は必死に闘へど、何にせよ先方は目に餘る大勢で思ふに任せない、僅に一方の血路を開き、一先づ宿屋へ引上げやうと手傷の山岡を負うて城門まで來たが、城門が閉ぢられて、剩さへ番兵までが反抗の態度を取つてゐる。

腹背敵を受けて、進退茲處に谷まり『是非がない、腕の連く限り斬つて〳〵斬り捲り、打死にする外はない』と一同は期せずして決心した。

既に恁うよと見ねる處へ、衙門の長官が馳せ來つて、群り寄る公衆を追拂ひ、博徒連一同を旅宿まで護衛して行つた。

騒動は此處のみに止まらなかつた、是より先き、群集の一手は、

早くも城外に出で、義陛店を襲ひ、博徒隊が血を以て勝ち得た二萬餘元の金額を奪ひ去つたのである。

博徒の連中に取つては誠に『泣き面に蜂』の痛さである、災禍交々下つて困却せざるを得ない。恁んな辛いことはない。

此の結末は何なつたかといふと、長官から日本人一同へ五十圓の見舞金を出すといふことで泣き寝入りとなつた。

余をして更に繰返さしめよ、『賽は魔物である』と。賽子を弄ぶ者の運命――朝の大名、夕は乞食――遂に測り知るべからざるなり。

四八　龍虎の劇闘、破天荒なる仲裁

滿洲小鐵――我慢の般若――商賣敵――朝鮮の――此の狸野郎！――復讐戦――大失敗――意趣返し――仲裁者――手打ち――軍事的秘密計畫

遼西地帶も大概な處は荒らし扱いたので、茲處に『滿洲小鐵』の稱ある中川が率ゐる一團は所謂蒙古路まで進擊して朝陽に、乗込んだ。

引續いて『我慢の般若』と字名を取つたる岩村が一隊も同

地へ乗込んだ。

此二組は營口に於いても、親分の顔と云ひ、乾兒の數と云ひ、細張りと云ひ、互角であつて互に負けず劣らず競爭せる結果、自然商賣敵となつて反目の姿で睨み合つて居た。

恁ういふ行掛りであるから、今度朝陽で落合つたが最後、無事で別れるといふことは到底望まれないのである。

『我慢の般若』の若い者で通稱『朝鮮の』といふのが居る、此奴朝鮮人ではあるが、斷髮して洋服を着、日本語を操ると、何しても日本人だ、氣前までが日本化してゐる、横着で鈍遲なる韓人のやうではない、長く日本をうろ〳〵した揚句、博徒の群に入つて義兄弟の交りを結び、遂に現在の岩村と親分乾兒の盃を酌た。今では『朝鮮の』〳〵と兄弟分から、一目敬てらるゝほどゝなつた。

岩村隊が朝陽に着した翌朝、此『朝鮮の』は一番駈に飛出して、市の中央の四角――朝陽一の目抜の場處――に店を開くや否や、

小林と云へる小鐵組の若い物が出掛けて來て場處爭ひが始つた。

『此狸野郎、此處は誰の場處だと思つて居やがる？貴樣、道樂者の挨拶を知らねへのか、後から來あがつて生意氣だ！』と叫破して『朝鮮の』の店を土足に掛けた。

『朝鮮の』も默つては居ない『箆棒めー滿洲まで來て其んな暢氣の事を云つて居られるか、早いもの勝ちだ』と云ふや、小林目がけて打掛るところへ、小鐵の部下四五人ばら〳〵と駈來つて『朝鮮の』を引礎る、さんざ踏み付けたり、蹴たりして逃去つた。

恨み骨髓に徹したる『朝鮮の』は馳せ返つて兄弟分を語らひ復讐戰を企てた。三十有餘人といふ大勢各手に短銃、仕込杖などの武器を提げ、急に馳せて、小鐵が本營を取圍み、發砲しつゝ家内へ闖入した。

小鐵方は全く不意を衝かれたので、大失敗を招き二名の重傷者さへ出すに至つた、岩村黨は勝に乘じ、手當り放題、亂暴狼藉至らざるなく、悠々凱歌を揚げて立退いた。

小鐵組でも此意趣返しを爲なければならんと、急に檄を飛ばして市中に出張る部下を嘯集し、隊を組んで、威儀堂々岩村方へと向つたのである。

此度こそ本隊と本隊との決戰である。幾多の『命知らず』の手合が、向ふ見ずに斬り合ひ打ち合ふのだから、慘憺極まる修羅場が現出さるゝのである。

此横町さへ曲れば、いよ〳〵岩村方の本陣であると、小鐵隊が勇氣更に百倍する處へ、何處から出たか、忽然として、行手に立塞がり、『まア待て！』と、ひ、止めた者がある。

氣が立つる若い者が『何者だ、其處退け！』と叱するにも臆せず此者は、最も沈着なる態度を以て宣告した。

『此出入は私に委せて下さい。屹度お顏の潰れるやうには計ひません、言過ぎるかは知れませんが、私は此出入をお止め申す權利

があらうと存じますし、貴方々も喧嘩をお止めなさらなければならぬ義務があらうと存じます。それも斷然とお仰るのから、生意氣のやうですが、此私がお對手致しますから私を血祭りになさつて、此處をお通りなさい」と優しき語句の中に斷々乎として侵すべからざる威嚴が籠つてゐる。

これ、抑々何人であるか、實に思ひも寄らざる意外の人物である

婦人だ！　婦人も婦人！、若いみづ〳〵しい日本の少女である。

而も馬賊の隊長といふのだから、意外は更に意外を重ねる。

此新來の女性は兩黨の壓轢を融解せしめんと瀕りに斡旋して、遂に和解の手打をなさしむるに至つた、然るに彼女は單に此和解を以て滿足しない、彼女の小なる頭には回天の大計畫が潜んで居る此計畫が手打の席上に演說となつて現はれた。其大意は「お互に海外に出ては少しでも國力の發展を計るべき筈である、然るに取るに足らざる事から喧嘩を爲出かし、人命を損する如きことがあ

つては、血で血を洗ふやうなもので、國力を損するのである。故に婦女子の身を以て敢て出しやばつて仲裁したのであるが、此を機會に此兩黨を合して一團となし、更に自分が加はり三國同盟を形作つて、新發展地へ向つては何である。といふのは、一同此處まで出て來て居るを幸ひ、所謂百尺の竿頭更に一歩を進み、蒙古に入り込まうではないか、今や優勢なる露國の貔貅は蒙古の北境を壓倒してゐる、我々の一團、此地に潜り込んで、兼て設計めるするのだ。此計畫は恐らく當局者と雖へども、着手せんと欲して而も能はざるところであらうと思ふのだから、我々率先して是に當り其効を奏し度いのである」といふにある。

軍事的秘密計畫を實行

彼女の所謂大事業とは何ぞや。此を說くに先つて、乞ふ少しく彼女の經歷を述べしめよ。

四九　女馬賊

容姿最も優美――是で何して男の上に立つ？――一篇の小説――十九年が經歴は小説以上の珍

破天荒なる仲裁者として現はれ、破天荒なる計畫を吐露せる少女は何な代物であらう、何して此んな蠻地へまで來て、何して馬賊などに爲つたのだらう、定めし少女の特質とも云つべき嬌態などといふものはなく、いかつひ圭角せる男みたやうな化物であらうかと云ふと全然正反對である。容姿最も温和で、優美で、荒き空氣をも厭ふらんと思はるゝ纖細さ、みづ〳〵しさ、是で何して、幾多の荒くれ男の上に立ち、彼等を手足の如く顧使し得るだらう？と思はるゝ。

彼女が生れて今日に至る經歴は宛然**一篇の小説**である。否絶にず「運命」の定めなき手に翻弄せられ、榮枯盛衰極まりなく明暮れたる**十九年**は**小説以上の珍**である。或は全盛時代の榮華物語あり、或は落魄時代の困究史あり、或は暗黒時代の哀史あり、人をして或は泣かしめ、或は笑はしむるのである。

五〇　波瀾多き澤村お蝶が半生

東京ッ子――赤血球――江戸的遊藝――界限少女界の女王となる――無限の勢力――非常の感化力――お蝶本位――美人崇拜論――婦人の美は標利なり――醜婦は災なり

我少女は東京ッ子である、親父は澤村梅吉と呼べる大工の頭棟だ母親も亦生拔きの江戸ッ子だ。で兩親が混りあき純江戸ッ子的**赤血球**が其一子**お蝶の血管に傳**はつた――今日程ハイカラ風が風靡せざる其時分、平民の子に「てゞふ子」なんて、矢鱈に「子」などを附ける可笑なまねは流行らなかつた。

天稟縹緻良なる彼女は、加はる年齢と共に益々其美を發揮するのである。

當時尙神田山王の諸祭禮盛んに行はれ所謂「嬶あ質に置いても祭禮を氣張らう」といふ江戸ッ子氣質が、今日ほど消耗しなかつた

ので、娘を持つ親は盛んに江戸的遊藝を仕込んだものだ。而も我お蝶は此道に掛けては天才である、後世恐るべしと多大の望を屬されたた。

彼女の美容、彼女の技藝、彼女の氣前は界隈の娘より愛せられ、敬せられ、遂に推されて彼等の**女王**となつた――恁うなつたのは、一つには羽振善き親父の勢力が餘程手傳つたのでもあらうが。恁て彼女は娘達の上に**無限の勢力を有し**、言として聞かれざるなく、行はれざるなきに至つた。お蝶の**一顰一笑**は幾多の娘達が**喜憂**となつた。『彼んな人は嫌ひ』と一言言つて退けられやうものなら、其娘は可哀相に除け物とされて交際者が無くなつて了ふといふ程だ。

加之、お蝶は**非常の感化を與へた**。**彼女を中心とせる此界隈の娘の氣風は**他處の娘のそれに比して**一氣風變つて**了つた。

一方に於いて**町内**に於ける**娘**の**趣好**、**髪**、**衣裳**、**言葉**等何でも總てが**お蝶本位**である、娘は衣裳の撰擇を母親に謀らずして、お蝶に謀るのである。お蝶の一擧一動は隣り近邊の流行の淵源となる。よし當時元祿模樣が一世を風靡することがあらうとも、我お蝶の勢力範圍を蠶食することは出來ない。

芝居見物に、花見に、汐干狩に、川開に、皆お蝶と同行するを樂しみとし名譽とせざるはない、全年輩の者は言ふ迄もなく、年齡上の者まで來つて彼女を敬めるのである。

嗚呼お蝶も亦偉なる哉！

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆

遙べ來つて弦月密に思ひらく、婦人の美は**權利**である。**資格**である。**誇矜**である。**飾**である。**勢力**である。**光明**である。**氣燄**である。之に反して**醜婦**は**災禍**である。**罰當**である。**無禮**である。

恥辱である。**糞垂**である。

美人にして初めて**小説**の**主人公**たる**資格**がある。美人にして初めて**藝妓**たる**價値**がある。自轉車に乘る自由を有す。玉

公園を**逍遙**する**權利**がある。美人にして初めて男子を品評する權能が

の輿に乘る格式を有す。美人にして初めて**結婚**する**特權**がある。**珠玉**、**美**にして初めて**婦人**

ある。美人にして初めて**珠玉**の**眞價**あり、**婦人**、**美**にして初めて**婦人**

たるの**資格**を**有し得べし**。

婦人をして悉く醜ならしめば、彼等悉く慚死すべきなり。宜しく

太陽の眼を憚つて暗夜行くべきである。然るに稀に美人のあるあ

つて、婦人界の救世主となり、危く彼等が地獄に陷らんとするを

救ふが爲に、人類に伍して生存するを得るのである。

美人崇拜主義を抱ける余は、敢て醜婦を咀ふ、仝時に美人の膝下

にはひよ〳〵、頓首九拜するを辭さない。

弦月の屁理屈は終る。

五一　天才、姫御前の文身

古今獨歩――兩親の誇り――金錢に糸目を附けない――縹緻は可し藝は可し衣裳は可し――文身の計畫――血達磨――得意なる踊に因めるもの

遊藝に就いてお蝶が天才を有せるは既に述べた、殊に踊に至つて

は、得易からざる獨得の手腕を有した、其技の進歩の驚くべく速

かなる、云ふべからざる妙味を含みたる、古今獨歩と云ふべきだ。

彼女の踊は獨り彼女自身が衿たるのみならず、仝時に兩親の衿たるのみ

ならず、仝時に兩親の衿である、此處彼處のお淺から、お蝶を借

りに來れば、喜んで出して遣るのが例だ、踊に要する衣裳粧飾は

金錢に糸目を附けない、幾何でも費るのを辭さない。

縹緻は可、藝は可、衣裳が可と三拍子揃つてゐるので、お蝶の評

判益々高く。兩親の鼻愈々高し、最う此上は幾何程金子に飽かし

ても、此上の衣裳はない、此上の費を言つても出來ない相談だ、

最う疑りやうがないとなるや、親父は突飛なる考へを起した。金錢で求め得られざる天下無類最善最美なる粧飾をお蝶に施して、世間をあつと驚かさうといふのだ、即ち彼女の肉体に華美なる文身をしやうといふのである。

互に競つて文身を施し其精巧を自慢した江戸時代の風は、今も尚俠客の手合が間に存してゐるのであるが、婦人に至つては今時類があるまい。

お蝶が最う恁んな事が最好と來て居るのだから、一も二もなく親父の望みを實行することにした。初めは、最負役者左團治が當り狂言『血達磨』が宜いと決まつた。その朦々立上る火鉄は極く真赤の色を入れ、大川友右衛門は勿論高島屋の似顔にする。これならば全く江戸式であると、下絵までも取らしたのであつたが、母親の意見が豹變したので、此意匠を一變し、更に、お蝶が最得意の踊に因める或物を文ることになつた。

五二　石橋、眞紅牡丹

十八番中の十八番――狂ひ獅子――身の輕さ――獅子の狂へるを見てお蝶を見す――ぱつと眞紅牡丹が一輪――丹精の文身――活々せる玉の肌の血色――嫉妬の極嫉妬の極――お蝶が得意――今も尚眼前に髣髴する

此翌年は春の末、江東中村樓に於いて盛大なる『お浚』ひは開かれぬ、此日の呼物は言ふまでもなくお蝶の出物たる石橋である。石橋が彼女の十八番中の十八番なることは、苟くもお蝶の名を知る者にして知らざるはない、此日特に番外として演せらるゝのである。

數々の番組は順を追ふて演せられたが、所謂『お浚ひ』的で、眞に藝の見るに足るべき物は一つだになかつた。よし多少上手いものがあらうとも、觀客の目的一に番外にあるのだから、其等が眼に入らう道理がない。

いよ〳〵番外の幕は開かれぬ。

奇巖怪石錯雜として積重なれる深山路一面、爛熟たる牡丹を以て埋めて居る、眞紅なる花の色は四邊を照して眩しげなり。

静に現はれ出たる獅子は、花の木の間を行き交ひて足場を量るものゝ如し、軈て徐ろに狂し初める、岩間〳〵を飛越へ飛交し、蹴を振り、尾を掉り、一動は一動より捷く、一躍は一躍より急なり機熟して佳境に達するや、動作の捷きこと、身の輕きこと風の如く、宙を飛ぶかと疑はる、或は危き斷崖の橋頭に立ちて絶壁に臨み、頭を打振り〳〵、房〳〵したる鬣に波を打たすと見る間に、忽然として巨岩を飛越へ、咲誇る牡丹を脚下に蹂躙る。實に、見る人をして、眞に狂せるにあらずんば恁うは狂へないと思はせた、舞臺の上、只獅子の狂へるを見て、お蝶を見ない。由來『石橋』は虚弱き少女に烈し過ぎるのであるから、今しお蝶が此猛烈なる働作を見たる師匠は、彼女の身体に障らなければ宜いか？と按じた程である。

然るにお蝶が此日の見せ場は此處止まるにあらず、更に觀客が少も豫期せざる破天荒的山を演出せやうといふのだ。

曲將に終らんとする刹那、彼女は觀客を背に、石橋の中央に立ちて、着重ねたる幾枚の衣裳を肌脱いだ、最後の肌着をも脱せんとするのである。

今までも彼女の至妙なる藝術に恍惚として醉へる觀客が凝視せる舞臺の正面に、忽然として、目もあざやかなる眞紅牡丹の一輪ぱつと咲いた。大さ舞臺を蔽はんばかり、色は燃ゆるかと思はるゝ。

觀客は皆其眼を疑つた。

是ぞお蝶が一年間も丹精を凝らして文り上げたる文身なる。見よ！今し彼女は狂ひに狂ひ大活動せる爲め血液の循環最も活潑にかつてゐるから、雪の如く純白なる肌は、浴後でもあるかのやう、殊更に血色美しく活々して居る。爲めに眞

紅牡丹は一段の光彩を增して、得も言はれぬ色艶である。

餘りに鮮過ぎて長く凝視することは出來ない、此嬋妍を盡し、艶麗を極めたる最善最美の感に打たれ、觀客は恍として賞むる詞を知らなかつた。

實にお蝶が文身は、今日此處に廣人稠坐の晴の場處に於いて、充分なる光彩を放ち、其目的を遺憾なく達したのである。

彼女の得意察すべく、父梅吉が揚々たる意氣推測すべきなり。

恁くて此日の「お淡ひ」は空前絶後の「お淡ひ」と呼ばるるに至つた。

「當時を回想すれば、お蝶の眞紅牡丹の文身が歴然眼の前に髣髴する」とは此日の觀客が今も尙口にするところである。

五三　痛快淋漓なる懲戒

家運一轉――藝者となる――京間牡丹――三幅對――小股のくつた後妻――暴力處女の神聖を汚さんとす――稽古屬で鬱る

此時分がお蝶の全盛期であつた。

黄金時代であつた。此お淡ひが濟んで間もなく、彼女の家運は一轉した、踊の師匠が頓死したので、兼てお蝶の親父が其氣に入の師匠の爲めに、連帶となつて金子を借りて遣つてあつたのが、皆お蝶の處で返濟の責任を負ふやうになつたのである。

一家の急を救ふべく、お蝶は自ら進んで藝妓となり、甲府遊廓甲子樓の抱となつた。

地は京間牡丹の故事を以て名あるの甲州たり。

樓は牡丹の名花を秘藏する遊廓第一の甲子たり。

此處へ眞紅牡丹の文身ある踊の名手お蝶が藝を賣るべく流れ込んで、牡丹の三幅對を作つたのは、何か因緣事でゝもあるやうな氣がする。

然れども、彼女が甲府に於ける線は淺かつた。その翌年の牡丹期に此處を立退かざるべからざる出來事が生じた。

恰度、甲子樓に於いて牡丹觀覽の盛會が開かれた當日であつた。厚化粧あざやかに、綺羅を盡して見世を張れる花壇の牡丹には目も呉れず、潰し島田髷一糸亂れず、きちんとせる次紋の上から細き白き襟元を見せ、やつと引ゝりたる七珍のお大鼓格好能く結ばれ、小股が〆つて、きりゝとせるお蝶が後姿に見取れた男子があるゝ、此奴勃々たる野心を制する能はざりけん、暴力を揮つて、危く彼女が處女的神聖を汚し、眞紅牡丹の神逸を損はんと掛つた。踊の素養淺からぬお蝶は、素早く此無禮漢の利腕を取て押へ、雖なく捻伏せて、帶に挟める稽古扇子を抜き、破れよと斗り力を籠め一打男子の横面を打つて、其儘ぷいと戸外へ飛出した。此日から甲子樓にお蝶の姿は見ゝなかつた。

五四　流轉又流轉

大阪趣味、大阪言葉を嘗ム——滿洲に行く——海に投身す——營口金城館金千代

甲府を後脚で蹴つて退去たお蝶は、上方へ走つて大阪北新地の花柳界に現はれた、此處に於いても彼女が獨得たる至藝と、天禀の容姿は忽ち全盤を抜いて該社界の牛耳を執るに至つたが、

大阪趣味と大阪言葉とは、何しても粥を好まざるお蝶の氣に入らない、長く忍ぶ所にあらず、漸く此處も嫌になつて、おさらば。

當時日露の戰爭酣にして內地は非常の不景氣に陷りたるに反し、滿洲には金子が落ちて居ると言はるゝほど彼方が盛んであつた。誘はるゝまゝにお蝶は營口へ渡つた。

天は幾度後女を試むるのであらう？　此渡航の海上、全じく乘込める惡魔に脅されたるお蝶は、**死を以て我身の潔白を護る**べく**海に投**じたのであるが、幸ひに——天祐であつたのだらう——救ひ揚げられて、目的地に着くを得た。

營口に於ける第一流の旗亭金城館が抱初代目金千代は即ち澤村お

蝶が渾名である。彼が東京っ子であるといふ点が、奇を好む人氣に投じて、忽ち流行子となつて、『金城館の金千代か、金千代の金城館か』と言囃さるるに至つた。一面、彼女が感化力は仝館の藝者部屋の蔵風を改善した。さなきだに、和歌詠仲居お貞あり、文學藝妓金榮ある仝館の風儀は益々高尚にあつた。

數月を經ざるに、金千代のお蝶は、生れ故郷を仝うし、趣味を尊うする長田と云へる東京っ子と意氣相投合し、一生の苦樂を共にすることを約して身受けされた。

五五　好箇の芝居

黄海圖を賣つて利うける——五千圓——待偽る——沖に見ゆる小蒸滊船——強盗は我真人——度胸の大試驗

長田と云ふ男は瀬戸内の黄海圖を露探に賣附けて巧からぬ金子を得たので有名な男であるが、更に御用商人と結托して、防寒材料毛皮を陸軍に賣附けん爲め毛皮の産出地たる錦州に赴き、天橋廠と云へる船着場から營口に輸送すべく企てた。

幾萬枚といふ大數であるから、集めるに時日を要するので、長田はお蝶を具して天橋廠に滯在するに至つた。

第一回の買入れが済むや、長田はヂャンクを曳くべき小蒸滊船を此處に回漕すべく營口に出立した。お蝶は軍用手票五千圓を托されて、宿屋の離室に良人の不在を守つてゐる。

初めて男子の親切を感じたる彼女は、長田が少時の不在も物淋しくて堪らない。今日は歸るか、明日は戻るかと、日として濱邊に立つて入船を待たないことはない。

待ち暮らした或夕、一隻の小蒸滊船が入つたが、遥か沖に碇泊したので、何國の船だか暗くて見判が付かない、詮方なく彼女は悄然宿に皈つたが『彼の船が果して良人長田のならば、最う上つて來さうのものだ』と、お蝶は心待ちに待つたが、何の音沙汰もないので、『彼の船は、さうではなかつたのか』と諦めて寢やうとす

る途端、密と入口の戸を叩く音がする。『さては良人か』と待ち焦るゝ身の早くも戸を開くれば、咄！人影はない。『恁ういふ時には心に魔が射したり、狐などに誑されることがある、莫迦〳〵しい』と彼女は最ういよ〳〵諦らめて、再び寢やうとする。

然るに、又もや入口を叩く音がする、此度は明かにする。人聲もする、而も聞覺ねある聲だ。『今度こそ確かにさうだ』とお蝶は飛び立つ胸を抑へて飛んで出た。

開くる戸を、外より排してづか〳〵入り來るは最愛の良人長田と思ひの外、此は如何、短銃片手に持てる强盜だ、行成短銃をお蝶の胸に擬して『五千圓給我！』と强請する。

お蝶は、彼の金子のあることを何して盜賊が知つたのだらうと思つたが、何喰はぬ顏して『そんな金子はない』と首を横に振つた。强盜は聽かない『そんな事はない、確かにある筈だ。神妙に早く出せ』と迫る。

お蝶は飽くまでも『無い』と言ひ張る。

『遲々するなら、家探をするぞ』と脅す。

『するものなら、して見ろ、これでも日本人の片分だ、尙貴樣等に、そんな金子は有つたつて、呉れて遣ることは出來ないんだ、さあ、勝手にしろ。』と臆面なく言ひ斷つた。

此お蝶の言葉が終るか否や、盜賊は被れる帽子を手早く取脫けて彼女の側に走り寄つた。

意外！又意外！今まで盜賊に扮して居たのは誰あらう、彼女が寸時も忘るる能はざる良人長田其人ではないか。

餘りのことに、お蝶は己の視覺さへ信じなかつた。

長田は、彼女の度胸を試みんと、驚かしたこと、及びそんな事を爲て彼女の衿誇を侵したのを深く謝し、更に彼女の大膽極まるのを激賞した揚句『此ならば何事も打ち明けられる』と云ひながら彼の秘密を物語つた。

即ち、長田は滿洲に渡つて失敗してから、博徒の群に入つたのが手續きで、馬賊となつた――勿論日本側の――今では一方の旗頭であるのだ。

普通の盗賊と違つて、此んな性質のは、お蝶の氣に入つて、長田の身の上話は彼女を喜ばした。

それから部下の支那人に引合はされて、姉御と稱せらるゝに至つた。

五六　お蝶遂に馬賊となる

良人陸死す――亡夫に代つて部下を指揮す――軍事的秘密計畫

天何ぞ無情なる！　數奇なる彼女は、其後二ヶ月を經ざるに長田と永訣するに至つた、第二回の毛皮回漕に際し、海上大暴風雨に遭遇し、ヂャンクは轉覆し、長田は敢なく海底の藻屑となつた。

此報を得て、お蝶は動哭した、短き契りを悲しんだ。

己の不幸を悲しむよりは、より多く長田を哀む彼女の切情は、お蝶をして一生他の良人を向へない、獨身で送らうと決心せしめた。

そして男々しき彼女は、更に決斷した、亡良夫に代り、部下を指揮して、行れる丈け行つて見やうと。

依つてお蝶は將軍家光が故智を學び、部下の向背を試みたのであるが、彼女の大膽に舌を捲ける部下は悉く、彼女を新主領として忠義を厲まうと誓つた。

恁くしてお蝶は自ら主領となり、百有餘の手下を引率し、水草を追ふて此處彼處移住して、否寧ろ荒して歩いた。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

朝陽に於いて、彼女は圖らずも滿洲小鐵と我慢の般若との出入りの仲に入り、其手打の場で、口を破つた軍事的秘密計畫は、兩黨の贊成を得て着手することに一決し、其後着々實行されつゝある。

其何事であるか、此處に明記するは、其事業を妨害するの恐れあ

るを以て、余は德義上沈默すべき義務を有す。讀者、余に句あり、

「いろはにほへどちりぬるを
人の命の測量り知られぬ」

解せりや、諸君。

項外　暢氣千萬なる戰鬪演習

南北兩洋大演習講評――銃劍を着けずして突擊す――靴を脱いで川を渉る――突擊の際手ん拱ねて見物す――同志打ち――敵丸の下を悠々通過す

遼西及び滿洲に駐在せる清兵の意久地なくして、何の役にも立すして、はんの案山子に過ぎないことは既に記したる處であるが、袁世凱が麾下にあつて最新式の訓練を受け、全國の摸範と呼ばるゝ兵と雖へども、中々怪しいものだ、此十月行はれた南北兩洋軍が大演習を見よ、少しも實戰に臨んだ觀念がない、戰鬪最中河を渉るに悠々靴を脱いだり、銃劍を附けずして突貫したり、滑稽極まる事ばかり多い、試みに左の講評を見よ。

▼南軍は騎兵の全部を右翼にのみ使用して左翼を空うしたるは不可なり

突擊の際、左翼大隊中銃劍を着けざるもの多きを見る。敵と接觸するに至たらば、命令を俟たずして、自ら着劍するやう教育すべし云々

▼南軍にありては退却の際小行李が戰鬪部隊に先ちて退却せざりし爲め、大混雜を生じたるは大に注意すべし、又歩兵部退却するに當り

靴を脱して無名河を徒渉し、徒渉後更に靴を穿ちたる如きは殆んど對敵の觀念なきものなり。

▼南軍は敵との距離尚遠かりしにも拘らず連りに之を射擊し其漸く相接近するや陣地を脱出して前進したるがコハ自ら利器を棄てゝ敵の我に迫るの距離を減じ從て敵の損害を少なか

らしむるものにして誤計なり、又突撃の際或部隊は平然として何等のなすなきものありたるか、是れ以ての外の事なり、大行李は午前七時宿營地を發し諸部隊に先つて衛輝庄に至るの命を受け居りたるに戰鬪開始の當時尙呉家坡の南端に停滯したるは何故ぞ殊に味方の騎兵は之を敵の大行李と見誤り襲撃を加へたるに至つては失態も亦極まれりと謂ふべし

▼北軍騎兵は敵砲の有効射距離内を悠々軍屯に向て行進したるが實戰に於ては全滅したるならん（大阪毎日新聞に依る）

銃劔を着けざる突撃が何の効がある？靴が夫ほど、いたわしいのであらうか！　何故こんなに頓間なんだらう、間抜なんだらう。方圖が分らない。

新式摸範兵にして既に然り、他は知るべきのみ。兵の惡きは卽ち下士の惡きなり、下士の惡きは卽ち將校の無能を顯はす、清國なるもの奮勵一番すべきなり。

馬賊横行記（終）

明治三十九年十二月十日印刷
明治三十九年十二月廿日發行

馬賊横行記奥附

正價金四拾錢

著作者　高野巽

發行人　大阪市西區九條町五丁目一一八八　堀田金吾

發行人　大阪市南區北炭屋町四十九番屋敷　岡本增次郎

印刷人　大阪市南區末吉橋通四丁目十六番地　井下幸三郎

印刷所　大阪市南區心齋橋北詰一丁四ヘ入　井下浩進舍

發賣所　大阪市西區九條新道五丁目　堀田航盛館

發賣所　大阪市南區四ツ橋東南詰南ヘ入　岡本增進堂